岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(5)

国鉄井原線建設に伴なう
埋蔵文化財発掘調査報告

1974. 3

岡山県教育委員会

序

岡山県小田郡矢掛町は山陽道に面し、下道朝臣真備公の祖母の銅製骨壷が発見される等、重要な埋蔵文化財を多く包蔵している地域であります。

このほど広島県神辺～岡山県総社間に国鉄新線井原線が建設されることになり、この国鉄新線建設にともなう埋蔵文化財の取り扱いについては、文化庁と鉄道建設公団との間に昭和41年「覚書」が締結され、これにもとづいて文化財保護については、鉄道建設公団と県とでたびたび交渉を重ねてきました。その結果、路線内の遺跡については事前に発掘調査を行なうこととし、川面館跡および、毎戸遺跡については橋脚で通過することで、一部現状で保存することになりました。橋脚による一部保存が「文化財と開発との調和」という考え方の最良の方法とは考えておりませんが、これを踏台とし、さらに文化財保護に努力したいと考えております。

本書は昭和48年２月川面館跡の調査着手以来、昭和49年３月毎戸遺跡調査終了までの１ケ年にわたる調査の結果であります。川面館跡につきましては小田郡衙址と古くより言い伝えられていましたが、発掘調査の結果中世の館跡と判明しました。又、毎戸遺跡につきましても、古瓦が出土していることにより「寺跡」と考えられていましたが、今回の発掘により遺跡の性格の一部が判明したと考えられます。

本書には不備な点が多々あろうと思いますが埋蔵文化財に対する認識と理解のために少しでも役立つならば望外の幸いと思います。

発掘調査にあたっては、鉄道建設公団当局のご理解とご協力をはじめとし、井原線埋蔵文化財対策委員会の諸先生のご指導、ご助言をいただき、また、矢掛町教育委員会をはじめ、地元の方々のご協力とご鞭撻を賜りました。ここに謹んでお礼申し上げます。

昭和49年３月

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

例　　言

1. この報告は、国鉄新線井原線建設に伴ない岡山県教育委員会の主催によって行なわれた小田郡矢掛町における発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は、1973年２月川面館跡から調査を開始し、毎戸西方遺跡、毎戸遺跡の調査と継続され、1974年３月に終了した、
3. 岡山県遺跡保護調査団より申し入れがあり、国鉄新線井原線建設に伴なう埋蔵文化財保護対策委員会を設置し、教育長から下記の諸先生を委嘱した。
4. 調査組織

井原線埋蔵文化財保護対策委員

岡山理科大学教授	鎌木義昌
倉敷考古館学芸員	間壁葭子
自家商業	西岡憲一郎
玉島高等学校教諭	中田啓司

岡山県教育委員会

教育長	小野啓三
教育次長	渡辺甲子生
教育次長 文化課長	岡田政敏
参事	富岡敬之
課長補佐	水川冨貴男
文化財主幹	浅原健
文化財二係長	岡本明郎
文化財保護主事	河本清
〃	葛原克人
主事	下澤公明
〃	大谷猛
嘱託	村上幸雄

5. 矢掛町教育委員会の方々には種々お世話になった。心からお礼を申します。
6. 川面館の図版１・２・３は２分の１で、他は個々に表示した。

目　　次

序
例言
序章……1
　第1節　対策委員会の記録……1
　第2節　発掘調査経過……1
第1章　位置と環境……2
第2章　川面館の調査……4
　第1節　遺跡概要……4
　第2節　南側道の調査……5
　第3節　北側道の調査……7
　第4節　橋脚の調査……8
　　第1橋脚……8
　　第2橋脚……8
　　第3橋脚……8
　　第4橋脚……8
　　第5橋脚……8
　第5節　遺構……9
　第6節　出土遺物……10
　第7節　まとめ……11
第3章　毎戸遺跡の調査……12
　第1節　遺跡の概観……12
　第2節　遺構……17
　　1　建物……17
　　2　溝……23
　　3　土壙……26
　第3節　遺物……28
　　1　土器……28
　　2　瓦……34
　　3　鉄製品……39
　第4節　まとめ……40
第4章　毎戸西方遺跡の調査……41
　第1節　調査の概要……41
　第2節　遺構……41
　　1　弧状溝……41
　第3節　遺物……47
　　1　弧状溝出土遺物……47
　　2　トレンチ出土遺物……47
　第4節　まとめ……48

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　川面館跡全体図……4
第３図　主要遺構配置図……6
第４図　平瓦実測図……7
第５図　亀山焼実測図……7
第６図　柱穴列実測図……9
第８図　毎戸遺跡・毎戸西方遺跡付近……12
第９図　毎戸遺跡全体図……13
第10図　毎戸遺跡平面図Ⅰ……15
第11図　毎戸遺跡平面図Ⅱ……16
第12図　建物Ⅰ平面図……19
第13図　建物Ⅱ平面図……21
第14図　建物Ⅲ平面図……22
第15図　各遺構断面図……24
第16図　第６橋脚平面図……25
第17図　土壙Ⅰ……27
第18図　土壙Ⅱ断面図……27
第19図　土壙Ⅲ，瓦出土状態……27
第20図　土壙Ⅳ実測図……27
第21図　出土土器実測図……30
第22図　出土土器実測図……31
第23図　出土土器実測図……32
第24図　出土土器実測図……33
第25図　軒丸瓦実測図……35
第26図　軒平瓦実測図……36
第27図　平瓦実測図……37
第28図　平瓦，叩き目拓木……38
第29図　鉄製品実測図……39
第30図　毎戸西方遺跡平面図……43
第31図　トレンチ断面図……44
第32図　弧状溝実測図・土器実測図……46
第33図　出土土器実測図……47

図 版 目 次

〔川面館跡〕
図版１　南一北土層断面図 …… 49
図版２　出土遺物 …… 51
図版３　出土遺物 …… 52
図版４　出土遺物 …… 53
図版５－１　西より東を望む …… 55
図版５－２　東より西を望む …… 55
図版６－１　第１橋脚 …… 56
図版６－２　第２橋脚 …… 56
図版７－１　北側道Pit …… 57
図版７－２　第２橋脚Pit …… 57
図版８－１　北側道濠土層断面 …… 58
図版８－２　第１橋脚亀山焼出土状態 …… 58
〔毎戸遺跡〕
図版９－１　建物Ⅰ（南より） …… 59
図版９－２　建物Ⅰ・溝Ⅲ・Ⅳ（北より） …… 59
図版10－１　礎石（？）（南より） …… 60
図版10－２　建物Ⅰ・雨落ち溝断面 …… 60
図版11－１　建物Ⅱ（東より） …… 61
図版11－２　建物Ⅱ・溝Ⅲ（西より） …… 61
図版12－１　建物Ⅱ・柱穴Ｂ－２　軒平瓦出土状態 …… 62
図版12－２　建物Ⅱ・柱穴Ａ－４柱根 …… 62
図版13－１　建物Ⅰ・東部及び柱穴Ａ列（西より） …… 63
図版13－２　建物Ⅰ・東部（北より） …… 63
図版14－１　建物Ⅲ（北より） …… 64
図版14－２　柱穴列第２橋脚（北より） …… 64
図版15－１　溝Ⅰ，瓦，柱根出土状態 …… 65
図版15－２　溝Ⅰ（東より） …… 65
図版16－１　溝Ⅰ，瓦，柱根出土状態（北より） …… 66
図版16－２　第６橋脚全景（東より） …… 66
図版17－１　溝Ⅵ（西より） …… 67
図版17－２　第２トレンチ全景（東より） …… 67
図版18－１　土壙Ⅰ断面（北より） …… 68
図版18－２　土壙Ⅱ …… 68
図版19－１　土壙，瓦出土状態 …… 69
図版19－２　土壙Ⅲ出土軒平瓦 …… 69
図版20－１　軒丸瓦 …… 70
図版20－２　軒丸瓦 …… 70
図版20－３　軒平瓦部分 …… 70
図版20－１　軒丸瓦 …… 71
図版20－２　軒平瓦 …… 71
図版21　毎戸遺跡出土遺物 …… 72
〔毎戸西方遺跡〕
図版22－１　全景 …… 73
図版22－２　弧状溝内遺物出土状態 …… 73

序　　章

第１節　対策委員会の記録

昭和42年５月22日付けをもって岡山県考古学研究者の会から岡山県教育委員会教育長あての４項目の申し入れにもとずき、国鉄新線井原線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査についても埋蔵文化財保護対策委員会を設置することとなった。

岡山県教育委員会は昭和48年１月18日をもって、遺跡保護調査団に対し以下の文書を出す。

岡山県遺跡保護調査団

委員長　近　藤　義一郎　殿

岡山県教育委員会

教育長　小　野　啓　三

井原線埋蔵文化財保護対策委員の推薦について

平素は文化財の保護保存につきまして、格別のご配慮をいただき感謝いたしております。

さて、県教育委員会では昭和48年２月１日より国鉄新線に伴なう埋蔵文化財の発掘調査を予定しております。

つきましては、井原線文化財保護対策委員を若干名をご推薦いただきますようにご依頼申し上げます。

これにより昭和48年１月28日付けで遺跡保護調査団より、鎌木義昌・中田啓司・小野一臣・間壁葭子・西岡憲一郎以上５名の推薦を受けたので、県教育委員会は昭和48年１月25日付けをもって委嘱状を郵送した。

推薦を受けた５氏のうち小野一臣氏は健康上の理由により辞退されたほかは承諾された。

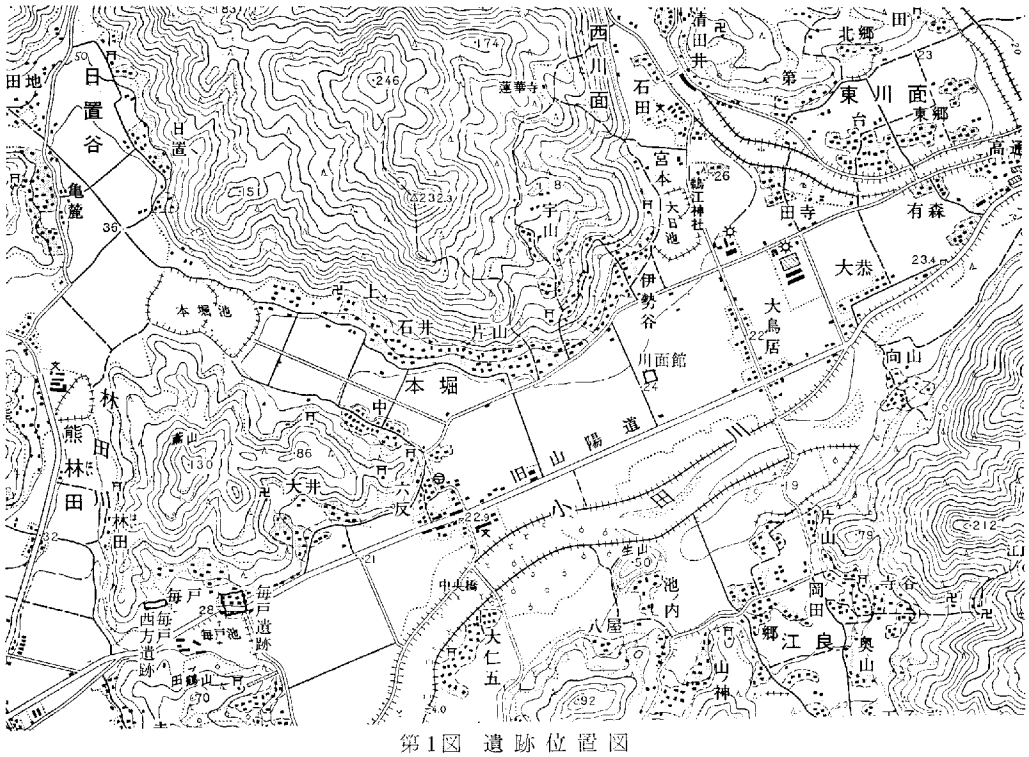
第２節　発掘調査経過

昭和42年に日本鉄道建設公団大阪支社より文化財の位置について協議があり、担当者が予定路線内の分布調査を実施した。その結果真備町小山遺跡・矢掛町藤棚遺跡・同川面館跡・同毎戸遺跡・同毎戸西方遺跡の５遺跡が確認された。

これ以来協議がなく、昭和47年に入り突如として日本鉄道建設公団大阪支社より矢掛町川面館跡、同毎戸遺跡，同毎戸西方遺跡の調査について協議があった。しかしながら県教育委員会は、昭和47年度中は中国縦貫自動車道及び山陽新幹線の発掘調査が継続中であるため、昭和48年度に調査に入るよう要望した。

昭和47年９月以降になり、山陽新幹線建設に伴なう発掘調査がおこなわれている島地貝塚の調査が昭和47年末には終了する見通しが出てきたので、昭和48年２月１日より井原線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査を開始することとなった。

第１章　位置と環境



第１図　遺跡位置図

岡山県小田郡矢掛町は岡山県の西部を流れる高梁川の支流、小田川沿いにあり、山陽道の宿場町として栄えて来た町である。南は弥高山・遥照山（ようしょう）等の山々、北には美星町につながる、定高性のなだらかな丘陵状の山々が連なる吉備高原が広がる。この山裾は開折され、小さな谷が入り込んでおり、小田川はこの吉備高原の南縁を西から東へ流れる。

小田川沿いは古くより交通の要衝であり、旧山陽道はこの小田川に沿って備中より備後へと続いていた。

矢掛町の遺跡は未だ不明の所が多い。弥生時代後期の遺跡は里山田の白江遺跡（注１）、芋岡山遺跡（注２）が良く知られている。他に山裾、低丘陵周辺部から土器片の出土は知られているが遺跡の性格は不明である。

古墳時代前期の遺跡はほとんど知られていない。中期になると毎戸塚等が知られる。

後期古墳は各谷の周辺の山斜面にそれぞれ一群をなす形で存在する。横穴式石室をもつものが主である。これら後期古墳の中には里山田・橋本の荒神塚のように岡山県下では類例の少ない石棚を持つものも認められる。（注３）

奈良時代頃の遺跡としては今回調査した毎戸遺跡の他、藤棚遺跡、吉備真備祖母の墓が知られる。藤棚遺跡は平城宮6225、6633、型式類似の軒丸瓦、軒平瓦を出土しており、その性格は寺院址、吉備一族の館址、あるいは柵とも言われるがその詳細は不明である。真備町から、井

原市へ小田川沿いに位置する岡田廃寺―吉備寺―八高廃寺―藤棚遺跡―毎戸遺跡―寺戸廃寺の全体の中で、又、毎戸遺跡の性格を考える時にも関戸廃寺をも含めて注目せねばならない遺跡である。

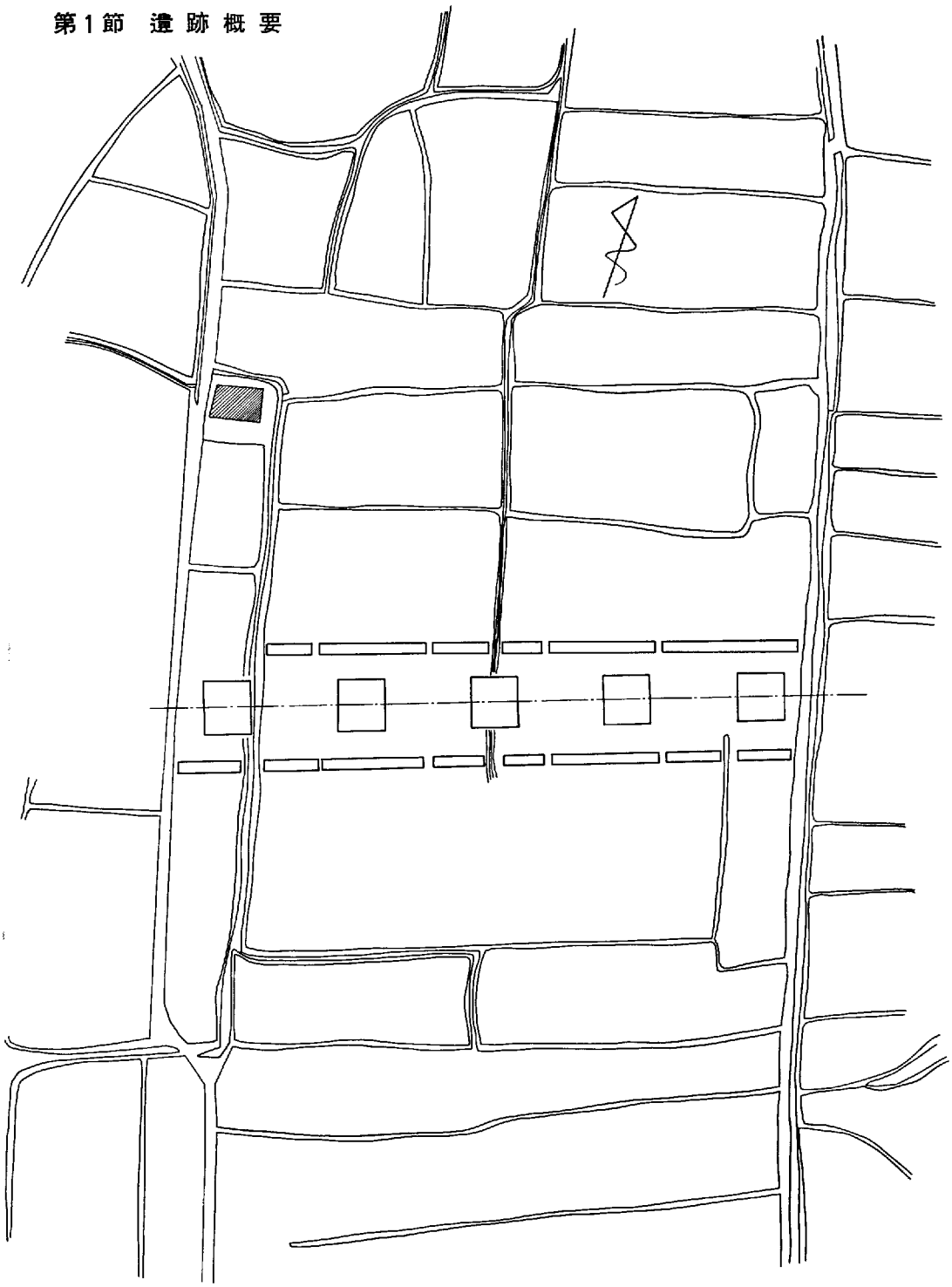
東川面字川田の木の山神社となっている磐座の遥拝所にあたると思われる所より、脚の高い有脚小杯が出土している。祭祀的な遺跡と思われる。この南方に式内社である鶏江神社があり、この神社との関連も考えられる。鶏江神社は川面館の北東約700 mの所に位置し、川面館とも何うかの関係かあったと思われる。

当地は交通の要衝である為、城郭も数多く築造されている。矢掛市街の東に茶臼山城址、真備町との境の所に猿掛城址がその旧状を良くとどめている。猿掛城址は豊臣秀吉の高松城攻めの時の毛利方の本陣となった城である。

注1．間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」倉敷考古館研究集報1号　1766. 3
注2．間壁忠彦・間壁葭子「岡山県矢掛町芋岡山遺跡発掘調査報告」7号　1967. 8
注3．　〃　　〃　「岡山の遺跡めぐり」　1970. 6

第2章　川面館の調査

第1節　遺跡概要



第2図　川面館跡全体図

遺跡は矢掛町より県道清音――井原線（旧山陽道）沿いに約2.5キロメートル西に行った地点に位置する。遺跡地は北に標高232メートルの宇山が、南には小田川が、さらにそれを越えると標高291メートルの伽藍山の山々が連なっている。小田川は護岸工事により旧来の姿を望めないが、宇山の東よりに伊勢谷という部落があり、その谷より流れる星田川と丘陵を一つ隔てて美山川がある。これら二本の流れは矢掛の町で合流し、そのまま小田川へと注いでいる。この流れのうち星田川については、現在の流路をとらず、伊勢谷の部落の端に用水池(大日池)があり、この池と遺跡地附近に残されている旧河川状態からすれば、星田川はこの川面館のすぐ西端を流れているものと推定される。館跡はこの小田川と谷とのほぼ中央にあり、現在でも地表観察において明瞭にその存在を知ることが出来る。地表観察における館跡の規模は南―北130メートル・東―西110メートル・北濠―15メートル・東濠―13メートル・南濠―19メートル・西濠14メートル・平坦部は南―北97メートル、東―西82メートルを測る。周囲の水田面との比高は、北―20センチ・東―10センチ・南―20センチ・西―30センチ・濠と平坦部との比高は北―5センチ～11センチ、東―23センチ・南42センチ～52センチ・西―25センチ～50センチをそれぞれ測る。

路線は旧井笠鉄道の用地と重複し、館跡を東―西に横切っている。調査は、遺跡を保存するということでの事前接渉で、橋脚で通るということが決定されていた。したがって、調査対象となったのは、9メートル20センチ×3メートルの橋脚部分5ケ所と南―北それぞれ2メートルの側道部分についてである。以下調査区ごとについて記していく。

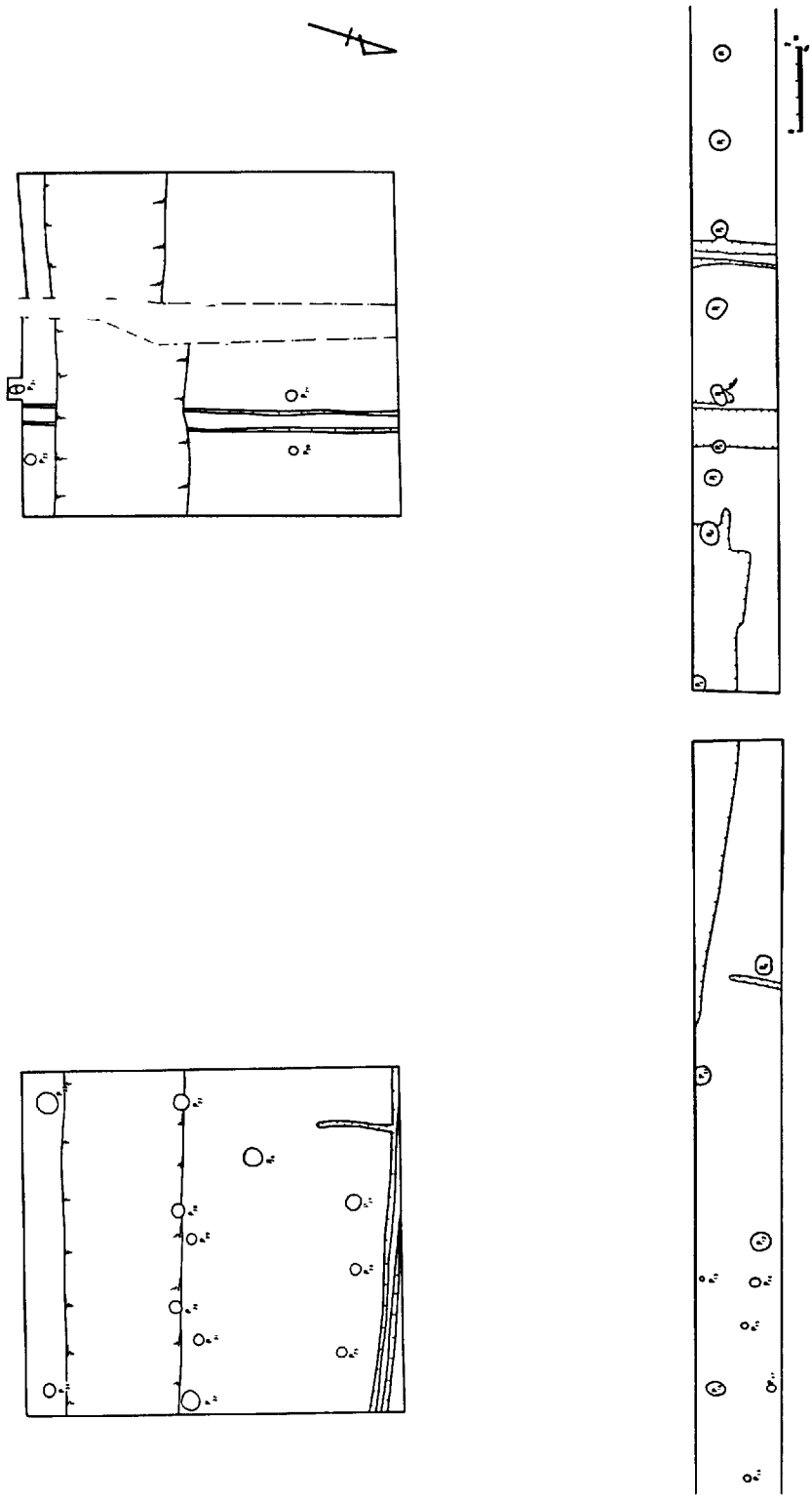
第2節　南側道の調査

幅2メートル・長さ105メートルで、一応任意に8区に分け調査を始めるが、ここでは平坦部・濠ということで以下述べて行く。

平坦部は、中央西よりは旧河川により、さらに東よりは明治以降と推定される暗渠とそれらに伴うと考えられる整地面が存在している。遺構面が存在すれば耕土よりさほど深くないレベルと考えられ、平均―80センチは土層が上述したような状態を示していることから、黒褐色土面に調査の主体をおいて、精査をしたが、遺構は検出されなかった。遺物の面においても砂礫層に若干含まれるものと、耕作土中からの出土に止まっている。南側道部分において検出された杭穴は、この黒褐色土層を切り込んでいるので何らかの遺構が残されていてもよいということになるが、この層に残されてないとすれば始めからなかったということも考えられる。この黒褐色土については、南側道において確認された生活面との関連で第3節で述べてゆく。

西濠は灰褐色粘質層の西、耕作土より―55センチにおいて削平を受けたと推定される断面を示している。従って濠の立ち上がりの線は確認されず、西壁の立ち上がりは調査区の関係でそれ以上の追求は不可能であった。

上面の幅は7メートル、底面は4メートル90センチを測る。西壁の立ち上がりはそのままの状態で切り込んでいるが、東壁については、段を有して切り込んでいる状態を示している。底



第3図　主要遺構配置図

面の状態は平坦に作られており、濠中央やや西よりにさらに掘り下げて溝を作っている。深さは耕作上より150センチを測る。

東濠は、西壁の立ち上がりは確認されたが、東壁については底部だけの立ち上がりを確認したに止まる。確認面での幅は7メートル75センチ、底面幅5メートル、耕作上からの深さは12メートルである。西壁の立ち上がりの状態は、西濠の東の立ち上がりが、段を有していたが、それと同様に三つの段を有している。東壁の立ち上がりについては不明である。底面の状態は西濠と同様に平坦に作られている。

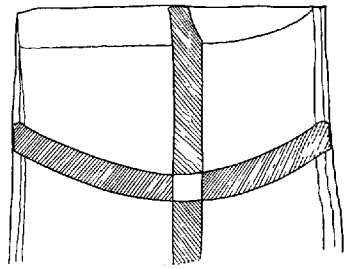
第3節　北側道の調査

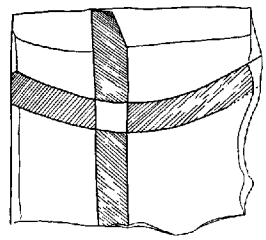
平坦部と濠との地表観察における区別は西濠について、畦により識別されたが、東濠においては平坦部がそのまま移行している。

50メートルの地点までは、南側道と同様な堆積状態を示している。特に14.5メートルから50メートルの地点までは砂層と礫層の堆積がみられ、明瞭に流路の断面を示している。

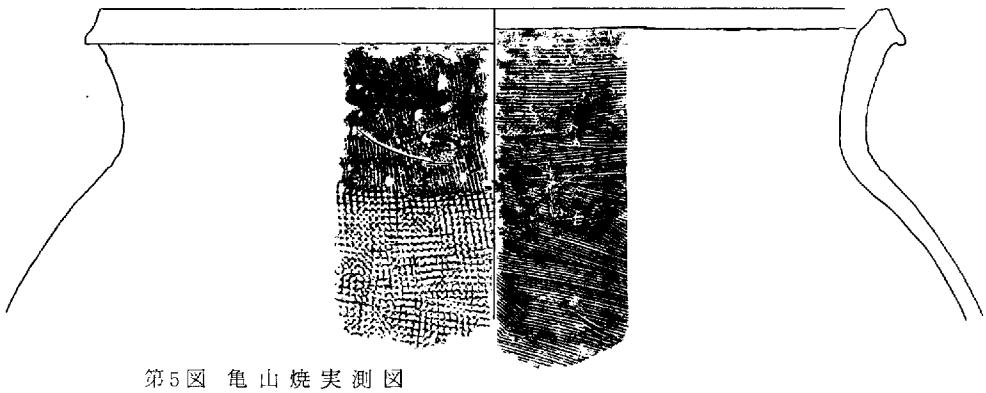
12メートルの所で40センチの間隔で二本の杭を検出する。木質の遺存状態から、かなり新しく、調査に来ている人の話からも推定される。この二本の杭については、土手との関連で後述する。

48メートル20センチの地点において、焼土、炭化材粒子を多量に含む灰褐色粘土層を確認する。この層はこの地点で始めて認められたものである。層中には土師質土器の細片が多く含まれており、この層以外には遺物の出土はみられなかった。この層は94メートル40センチの所まで確認された。堆積の厚さは、平均し26センチを示し、遺構は灰褐色粘土層が埋土となっているために、この堆積層を除去し





第4図　平瓦実測図



第5図　亀山焼実測図

なければ遺構プランは確認されなかった。

西濠は上面幅７メートル50センチ、底部幅５メートル耕作土よりの深さは１メートル55センチを測る。底面の状態は平坦に仕上げられている。西壁の立ち上がりは段を有し、東壁においても、同様に段を造っている。東壁部分にかなり大きめの角礫が落ち込んだ状態で認められた。

東濠は西壁の立ち上がりのみで、東壁については調査外となり確認されなかった。耕作土からの深さは13メートル50センチを測る。西壁の立ち上がりは、段状をなさず、緩やかな傾斜を持って、底面に移行してゆく。

第４節　橋脚の調査

第１橋脚

東濠にあたり、橋脚位置が西よりになっているため西壁の落ち込みの状態のみの調査に止まった。この状態は２段になり、それぞれ幅90センチ～１メートルの緩やかに傾斜しているテラスを有している。底面の土層状態は、粘土の堆積と出水のために確認できなかったが、かなり締って平坦に掘られている。

南端の壁よりに亀山焼の大破片を数片と備前焼の破片を出土している。

第２橋脚

北側道で検出された灰褐色粘土層を認める。しかしながら南側部分は幅２メートル70センチに渡って、旧井笠鉄道により消滅している。

遺構は東――西に走る幅18センチ～23センチの浅い断面Ｕ字状の溝と12個の柱穴である。

第３橋脚

中央部分を南北の用水路により区切られ、南端は他の橋脚と同様に井笠鉄道により消滅している。検出された遺構は、用水路より東側だけである。南北にのびる幅50センチ～64センチの溝と、その溝を跨ぐ格好でＰ19・Ｐ20とＰ21・Ｐ22が穿たれている。

溝及び柱穴の埋土は焼土・炭化粒を多く含む灰褐色粘土層である。

第４橋

南北両側道で認められた流路に当る所である。耕作土より20センチほど掘り下げた地点で砂礫層に達する。この流路は東溝のみの確認であるが、北西方向に向っていると推定される。

遺構は検出されなかった。遺物は整理の段階で、縄紋時代後期初頭の土器片を出土していることが明らかになった。

第５橋脚

事務所の設置との関連で、北側道の濠に当る調査を第５橋脚の位置に変更したので、これに代えた。

第5節　遺　　構

北側道部分と第2橋脚、第3橋脚で確認された溝状遺構と柱穴群である。

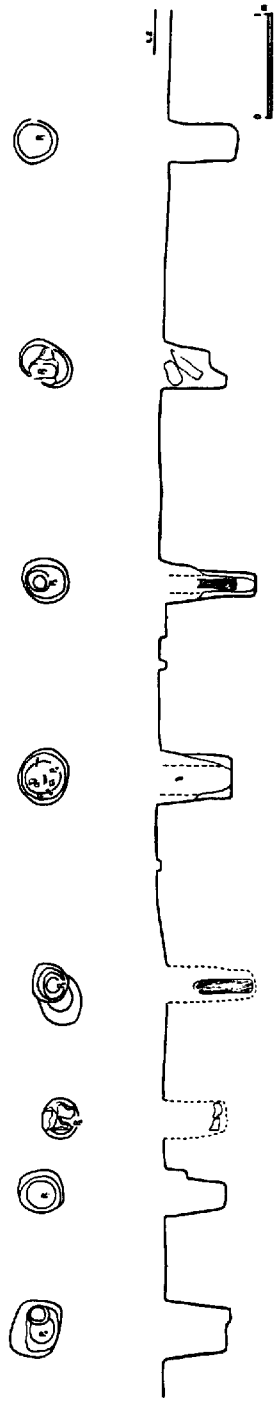
北側道で検出された柱穴はＰ１～Ｐ18までの18個の柱穴である。このうち何らかの建物を想定可能な柱穴はＰ１～Ｐ８である。これらの柱穴の規模は、Ｐ１－42×40、深さ65センチ・Ｐ２—53×41・深さ65センチ・Ｐ３－42×41・深さ93センチ・Ｐ４－55×49・深さ70センチ・Ｐ５－37×35・深さ85センチ・Ｐ６－37×33・深さ58センチ・Ｐ７－43×40・深さ58センチ・Ｐ８－55×45・深さ62センチをそれぞれ測る。又、Ｐ７・Ｐ５は柱が遺存していた。Ｐ１～Ｐ７の柱間は6.6尺を測る。Ｐ７とＰ８の柱間は4.29尺でＰ６とＰ８ならば6.6尺で行ける。しかしながら、Ｐ６は他の柱穴列の縁上より外れ、柱穴面に石を置くなどして若干の相違を見せる。柱穴の規模及び内容からすれば、Ｐ６を除いて６間と想定される。又、建換えの可能性もあるが、この柱穴列が建物のどの位置にあるのか、用地の関係で調査対象外になっているので確認のすべがない。

これより東側に確認されたピットについて、数が少ない上に、ピット間の距離が離れているために、具体的な関連を把握することは出来なかった。

次に橋脚部分について遺構が確認されたのは前述した如く第２橋脚と第３橋脚である。

第２橋脚で確認された遺構は、Ｐ23～Ｐ34までの12の柱穴と東～西に走る幅18センチ～23センチの浅い断面Ｕ字状の溝である。

橋脚部分の調査は側道とは異なり、ある程度の面を調査する為に、まとまった遺構の検出が期待された。しかしながら、比較的多くの柱穴を検出したが建物としてまとまった柱穴を形成する柱穴列を確認することは出来なかった。ただ、Ｐ27・Ｐ28・Ｐ30については柱間がそれぞれ、８.25尺×７.46尺で距離が若干相違するが、柱穴の中心線にのっている。このことから考えれば、現在南側旧井笠鉄道により削平されている部分に残りの柱穴列が存在していたとするならば、建物の可能性がある。さらにＰ33・Ｐ24・Ｐ25は柱間がそれぞれ5.55尺×6.40尺で、柱穴の中心線もずれているので建物の柱穴列として考えるのは困難であるが、東—



第６図　柱穴列実測図

西にのびる溝と、その溝から南―北部分に約1メートル90センチほどいって消える細溝との関連では何らかの有機的な連ながりを考えたい。なお、これから個々のピットはいずれも浅い。

ピットからの出土遺物は、P26からは投げ込んだ状態で円礫・備前焼の破片・無文の平瓦が出土している。これらについては第6節で述べる。

第3橋脚で確認された遺構は南―北に走る溝と4個の柱穴である。

溝は幅50センチ～64センチ、深さ約10センチで南―北に直線上に延びている。柱穴はその溝を跨ぐ格好で穿たれており、溝の上に何らかの上屋を想定される。この遺構については、他との遺構との関連が不明であるので、性格付けは困難である。

1	耕作土
2	耕作土（粘土質）
3	灰褐色粘質層（マンガンを多く含む）
4	灰色砂質粘土層
5	黄褐色粘土層(黒色粘土のブロックを含む)
6	灰黒褐色粘土層(　〃　)
7	青灰色粘土層
8	灰色粘土層
9	黒色粘土層
10	青灰色粘土層（砂を含む）
11	黄褐色粘土層
12	暗灰色粘土層
13	砂　層
14	砂質粘土層
15	礫　層
16	床　土
17	灰茶褐色土層
18	黒褐色土層
19	砂礫層
20	質粘土層
21	茶褐色土層
22	褐色土層
23	茶褐色粘土層
24	暗茶褐色粘質層
25	灰褐色土層
26	暗　渠
27	赤褐色土層
28	暗茶褐色土層
29	灰褐色粘土層（焼土，炭化粒を多く含む）
30	暗灰褐色土層

第7図　南北道部分土層名

第6節　出土遺物

北側道、第1・第2・第3橋脚からの出土が大多数である。土師質土器・備前焼・亀山焼・陶磁器などが出土している。以下述べてゆく。

土師質土器（図版第2図）―1～24は皿形を呈するもので、口縁部径4.5センチ～5センチ、器高1.0センチ～1.3センチを測る。底部の状態は糸切りをしたあとに、細い刷毛状工具による調整がみられる。胎土は砂粒を含み、焼成は比較的良好である。色調は灰白色を呈する。

25～46は杯形を呈するものである。口縁部径12センチ～9センチを、器高は18センチ～25センチをそれぞれ測る。口縁端部は外反して、丸味を有するものと、口縁端部が直立するものとの2種類がある。胎土・焼成・色調とも皿形のものと同一様相を示している。

なおこれらの土師質土器は灯明皿として使用された痕跡はない。

備前焼（図版第3図）図で示している破片はいずれも、やっと図を取れる程度のものであり具体的な観察は不可能であった。

口縁部は折り返して玉縁を形成するもの（1～6.9）、口縁部を肥厚させて丸味を持たせたもの（7.10.11）の2種がある。

焼成はいずれも焼きしまりがよく、非常に堅く焼成されている。

亀山焼（図版第4図）―第5図のものは第1橋脚から出土したもので、ほぼ口縁部が残されて

いる。口径52センチを測るかなり大形のものである。頸部からゆるやかに外反してゆき、口唇部を下方に拡張させ、端部を凹ませている。器表面の調整は口縁部から頸部下半にかけて荒く、深いタッチの櫛状工具による若干ななめになるが上から下に調整を施こしている。頸部下半からは、形の整のった縞目の叩きが、あまり重複することなく施こされている。

裏面は口縁端部は横ナデにより凹みをつけ、口縁部から頸部下半にかけて横方向の非常に荒く、深いタッチの櫛状工具により左から右へ調整され、頸部下半以下は、ななめに同様に調整されている。

9は第5図のものとほぼ同様な調整を施こされている。口縁端は拡張することはなく口唇部はナデによって凹状となっている。

これら亀山焼の胎土は荒い砂粒を含み、色調も茶褐色を示している時に焼成は若干あまい感じを受け、断面の部分を突くと、ボロボロと崩れてくるものが多い。

擂鉢（図版第4）—備前焼・亀山焼の2種がある。横方向の荒い櫛状工具を施こしたのちに、たて方向の沈線をするもの、たて方向の沈線だけのものとがある。いずれの擂鉢とも口縁端部は凹状になっている。20は胴部に把手を有している。

この他に土鍋（図版第4）、土師質の深鉢形及び平瓦2面が出土している。

陶磁器は南宋期の青磁・朝鮮製陶器などが量的には非常に少ないが出土している。なお天目の破片が1片出土している。

第7節　ま　と　め

小田郡誌において、当遺跡を小田郡家址として推定されており、現在も西濠の畔上に小田郡家址という標柱が建てられている。郡家という推定は調査の結果からそのようなものではなく中世の居館としての性格付けがなされた。

館の西半分は冠水のため遺構の検出をみなく、又、他の地表遺構は確認されなかったが、小田郡誌及び土地所有者からの話からすれば、現在小田郡家址の標が建てられている西濠の平坦部側の畔部分が50センチ～60センチの高みをもって存在していたことが記憶されている。さらに北側を調査において、断面に検出された2本の杭は、その木質状態からすれば比較的新しいものであるが、土手の土止めのために打たれたという可能性が強い。これらを考慮すれば濠の内側に土塁を巡ぐらしていたと推定される。

この土塁の存在により中世館址における一般的な形として把握することができる。

時期については、備前焼及び亀山焼から推定すれば室町以降であり、下限は天目茶碗の破片から戦国末までとして、その間を館の存続期間とすることができる。

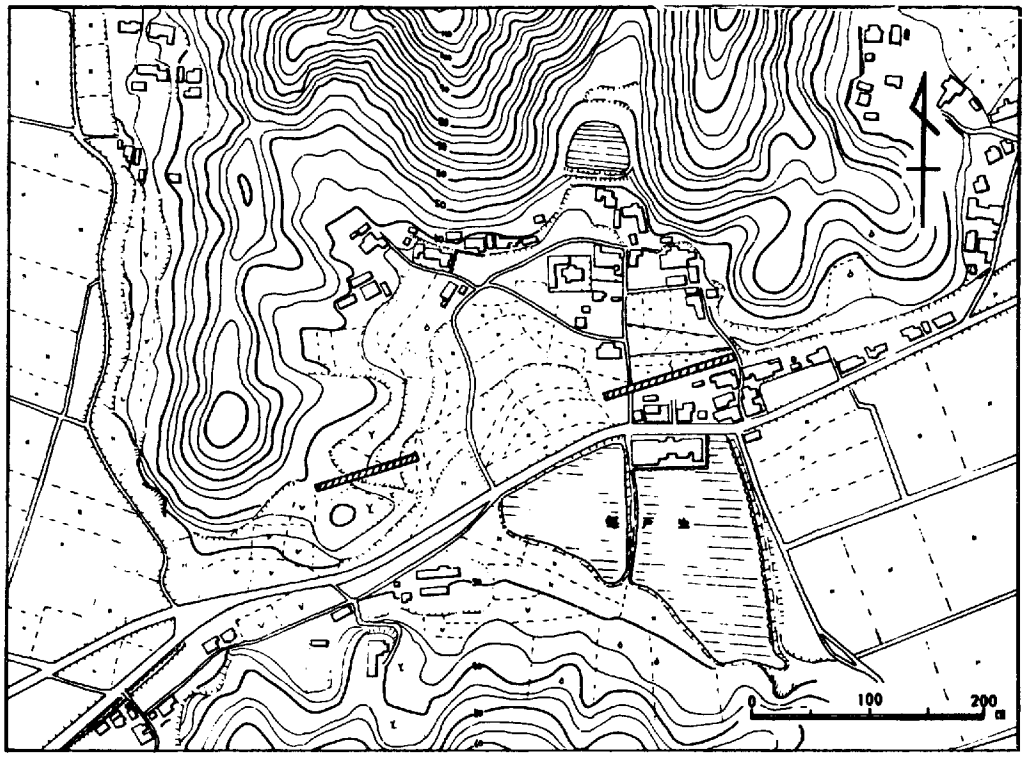
廃絶の直接的な要因は、遺構遺存面及び各遺構の埋土中に多量の灰・焼土・炭化粒が含まれていることなどからして、火を受けることにより絶えたと考えられるのである。

第３章　毎戸遺跡の調査

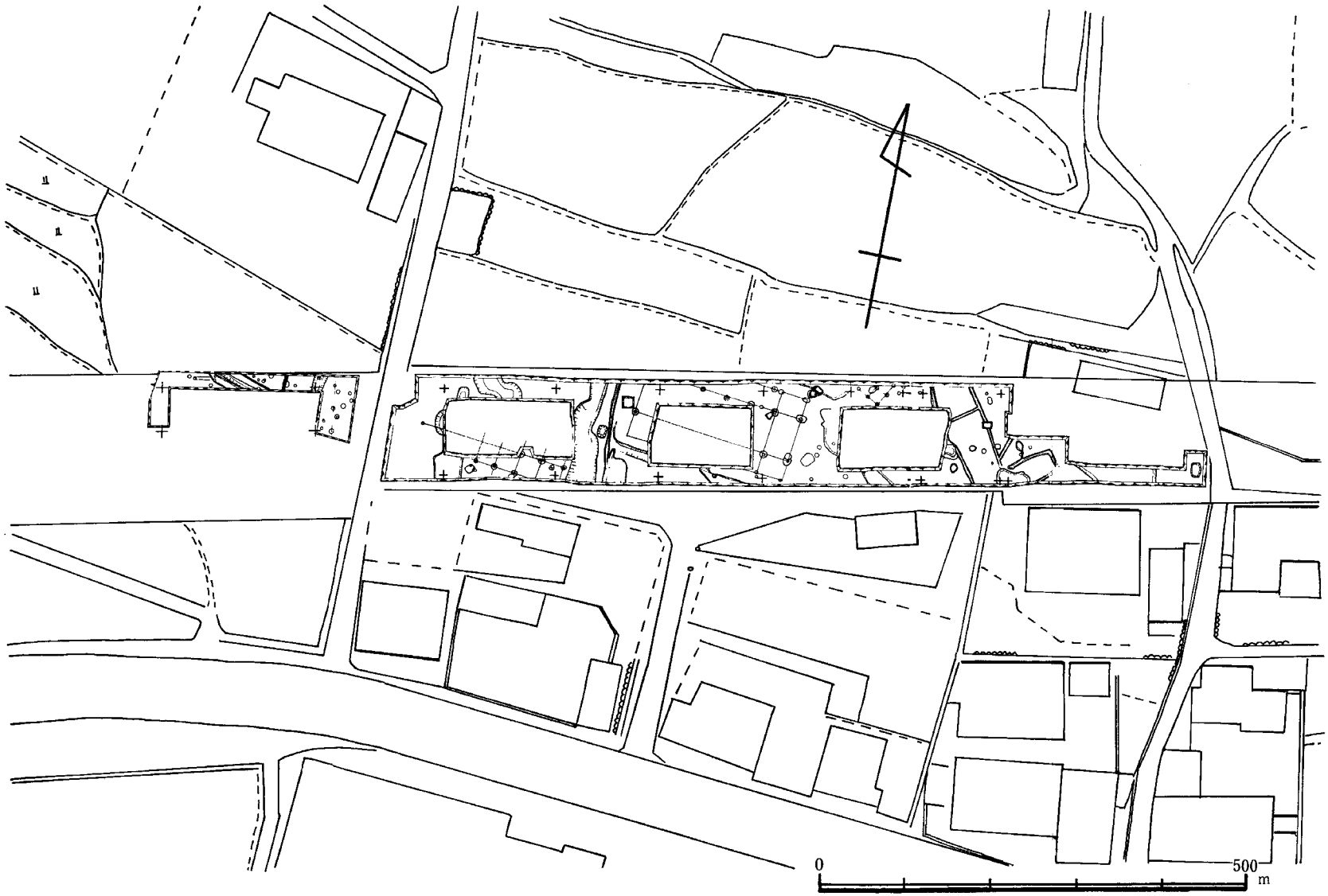
第１節　遺跡の概観

小田郡矢掛町は高梁川の支流である小田川の中流域に位置し、山陽道の宿場町として栄えた町である。この矢掛町の中心部より、小田川ぞい、西方約４㎞に鳶山と呼ばれている海抜130㎡の独立丘陵が存在する。この鳶山の南側は二つの谷が入り込んでおり、その西側の一つ、巾300ｍ程の谷の東側に毎戸遺跡が存し、西側の斜面に毎戸西方遺跡が存する。現在の地番は両遺跡とも矢掛町大字浅海字毎戸に属する。又、旧山陽道は両遺跡の前面を通っている。

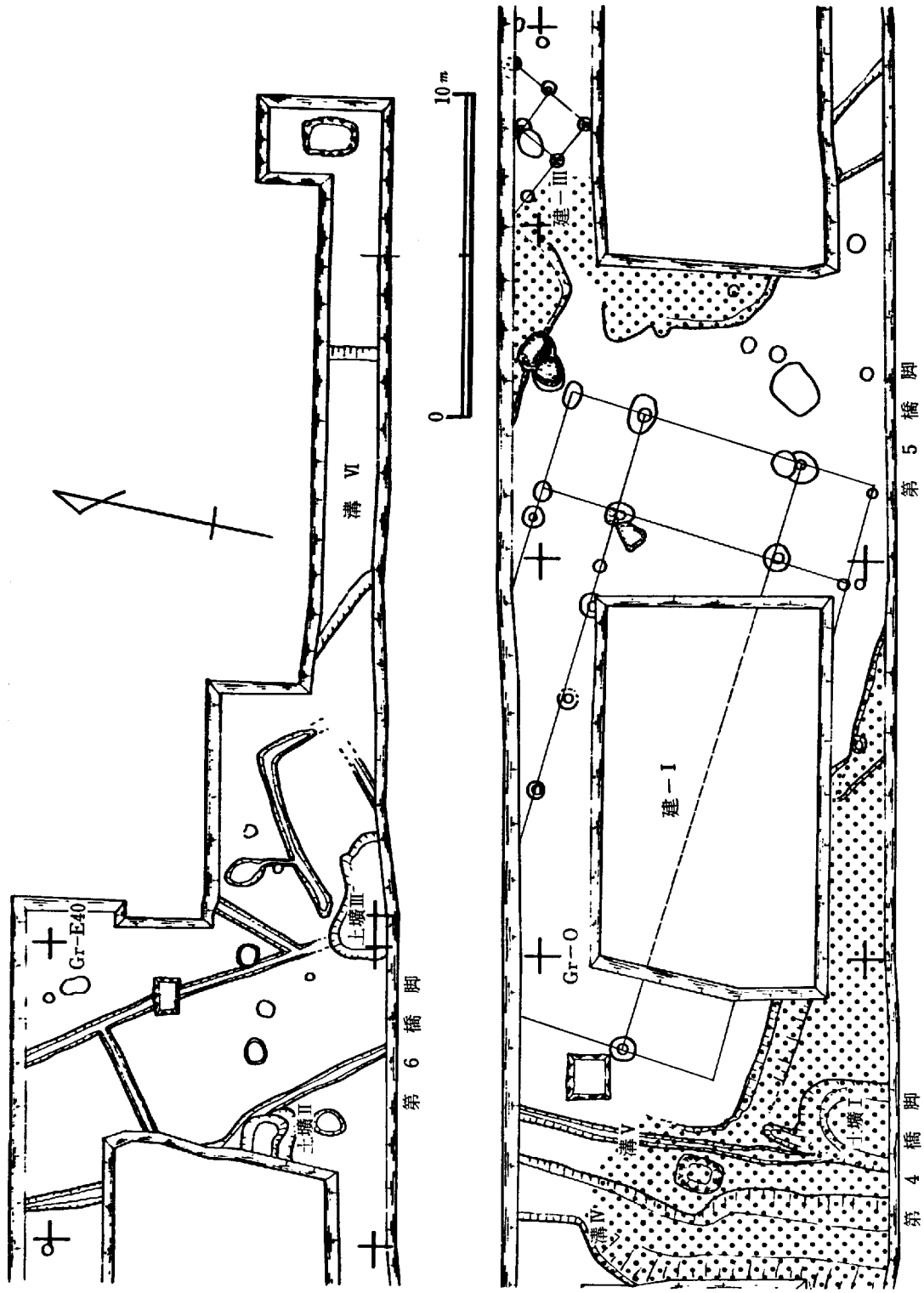
本遺跡は大正15年に軒平瓦、平瓦が出土し、昭和２年に軒平瓦が出土したことにより遺跡の存在が知られる。この出土瓦は永山仰一郎氏により、その著書「吉備古瓦図譜」に掲載され、「岡山県通史」（奈良時代の寺址）では本遺跡を「小田寺址」として、瓦の発見の状況等を紹介されている。又、本遺跡出土の軒丸瓦片・軒平瓦片は各１片づつ、倉敷市上東、板谷重郎治氏も所蔵されている。このように瓦が出土することは古くより知られていたが遺跡の性格は不明のまま「毎戸」の地が「和名類聚抄」(高山寺本）記載の小田郡駅里郷と考えられること又、「毎戸」の地名が「ウマヤド」の転訛したものと考えられることなどから、「延喜式」（兵部）記載の小田駅の跡の可能性も指摘されながらも、一般に、小田寺跡、又は毎戸廃寺と呼称され



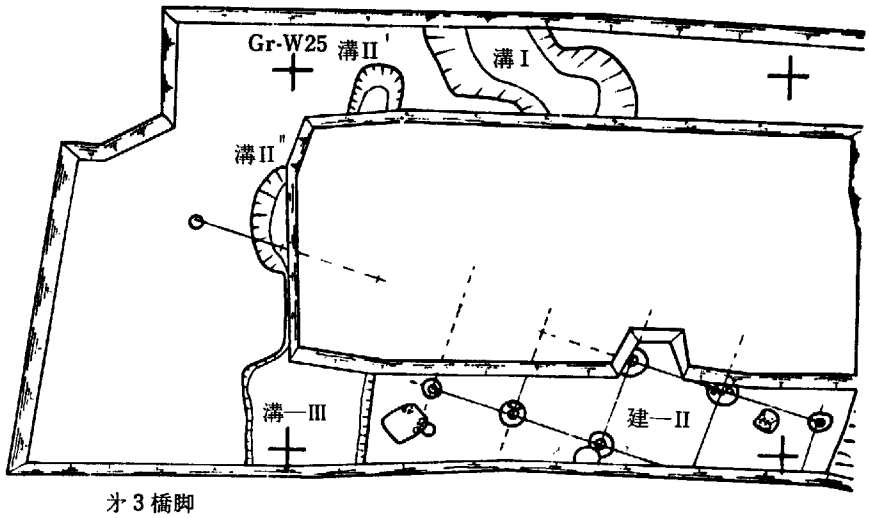
第８図　毎戸遺跡・毎戸西方遺跡付近

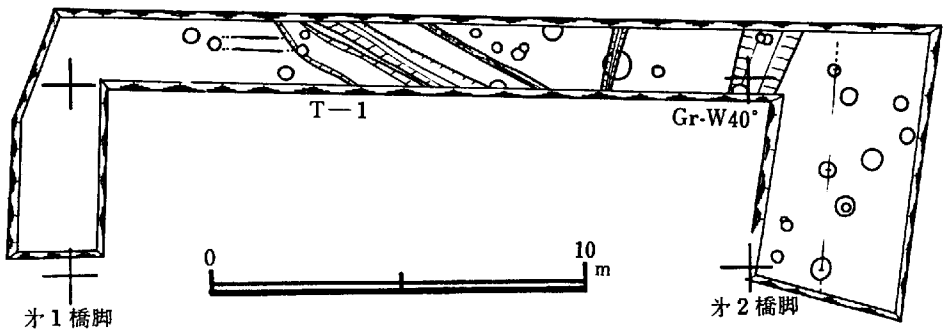


第9図　毎戸遺跡全体図



第10図　毎戸遺跡平面図 I





第11図　毎戸遺跡平面図 II

今日に至っている。

遺跡は現在、宅地・水田・畑となっており、畑等の区割、道等によると約100 m四方の区画が現在も認められる。旧井笠鉄道はこの区画の北側を東西方向に縦断して建設されており、国鉄新線井原線はこの旧井笠鉄道跡を拡張して建設される。

本遺跡の部分は22.9mの橋梁による為、7.4m×7.9mの橋脚位置が7個及び、南北各1本、巾2 m、長さ145 mの側道部分が今回の調査範囲である。橋脚は西より東へ、それぞれ第1橋脚・第2橋脚……とし、側道は第1・第2橋脚間北側道……としている。

第1橋脚、第1・第2橋脚間北側道部分は谷の中心部寄りに位置し、西側及び南側は一段下った水田となっている。側道部分からは柱穴、溝が検出されている。いずれも暗茶褐色粗砂を切り込んでおり、深さは10～15cm程である。又、地山は遺構面より1～1.5 m下った所で認められる。第1橋脚部分では遺構は検出されていない。遺物はほとんど出土せず、第2橋脚寄りで若干出土したのに溜まる。

第２、第３橋脚部分も検出された遺構は少なく、いずれも暗茶褐色粗砂を切り込んでいる。地山は第３橋脚北側部分より南西方向に下っていっており、これより東側では遺構は一部を除き地山を切り込んで作られる。第２橋脚・第３橋脚間の道路下は未調査であるが、道路近くからは瓦片、土器片の出土が比較的多い為、道路下に築地等の遺構の存在も考えられるのではないだろうか。地元の人の話によれば、道路脇の溝の工事の折も、多量の瓦片が出土しているとのことである。

第４橋脚～第５橋脚にかけては建物が検出された。建物Ⅰは中心建物と思われ、本遺跡は第３橋脚東側～第６橋脚西側にかけてが中心地域と考えられる。第７橋脚部分は遺跡の東端部分と考えられるが、溝Ⅵが検出された以外は遺構は認められない。又、出土遺物もほとんどない。

第２節　遺　　構

1.　建　　物

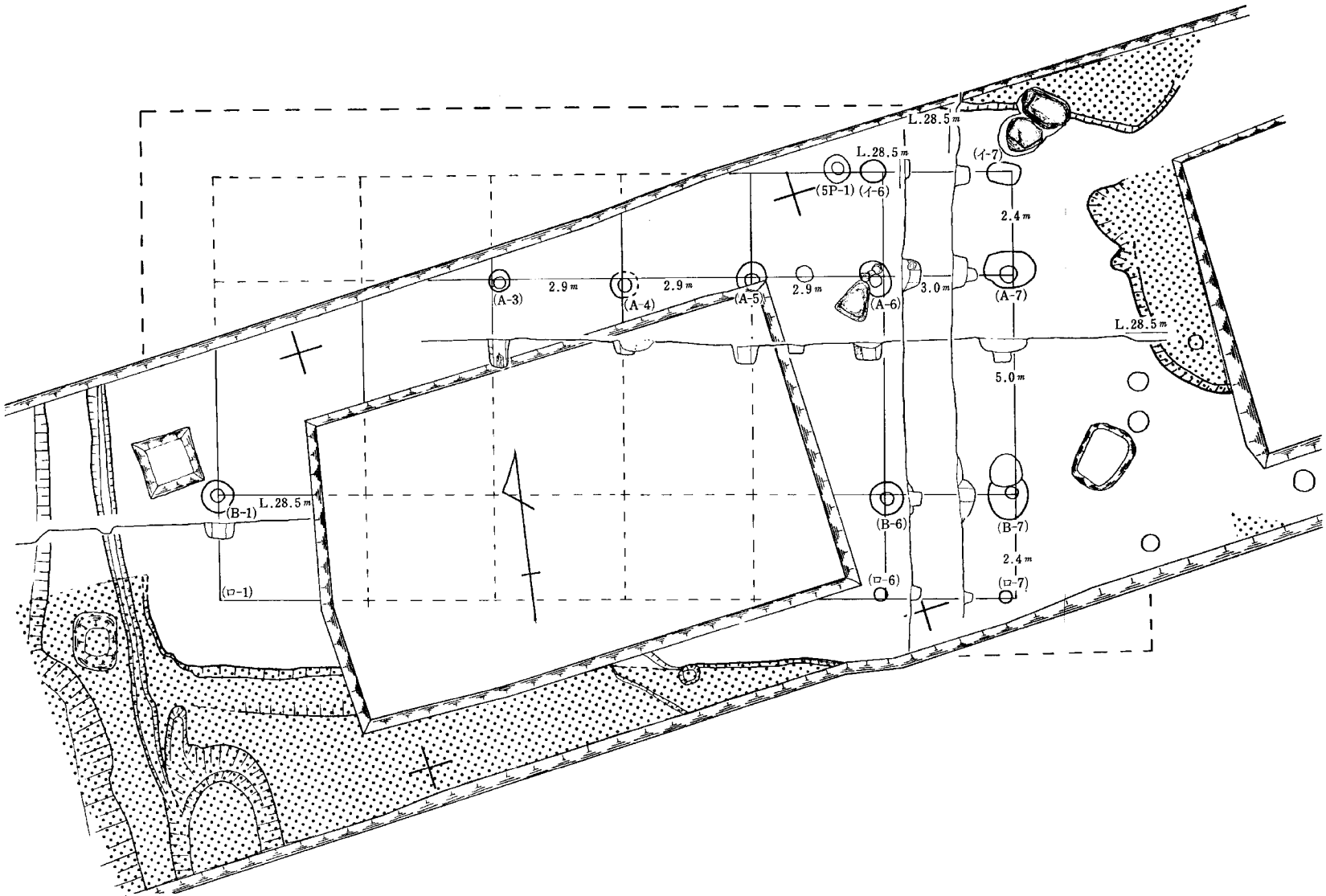
建物Ⅰ（第12図）

約100ｍ四方の区画内を東西に３等分した、西側２区画のほぼ中軸線上、北側に検出された。東西棟の掘立柱建物である。建物の中央部分、北西端、南東端は橋梁による保存部分と用地外になっているため、この部分は発掘を行なっていない。また南側半分は旧井笠鉄道用地であるため削平がいちじるしい。このため、建物の方向、間取り等の詳細な検討はできないが、現状では以下の通りである。柱間は梁行が東側の二例によると2.4ｍ＋5.0ｍ＋2.4ｍとなる。桁行が柱穴Ａ列によると3.0ｍ＋2.9ｍ＋2.9ｍ＋2.9ｍ＋（2.9）ｍ＋（3.4）ｍとなる。

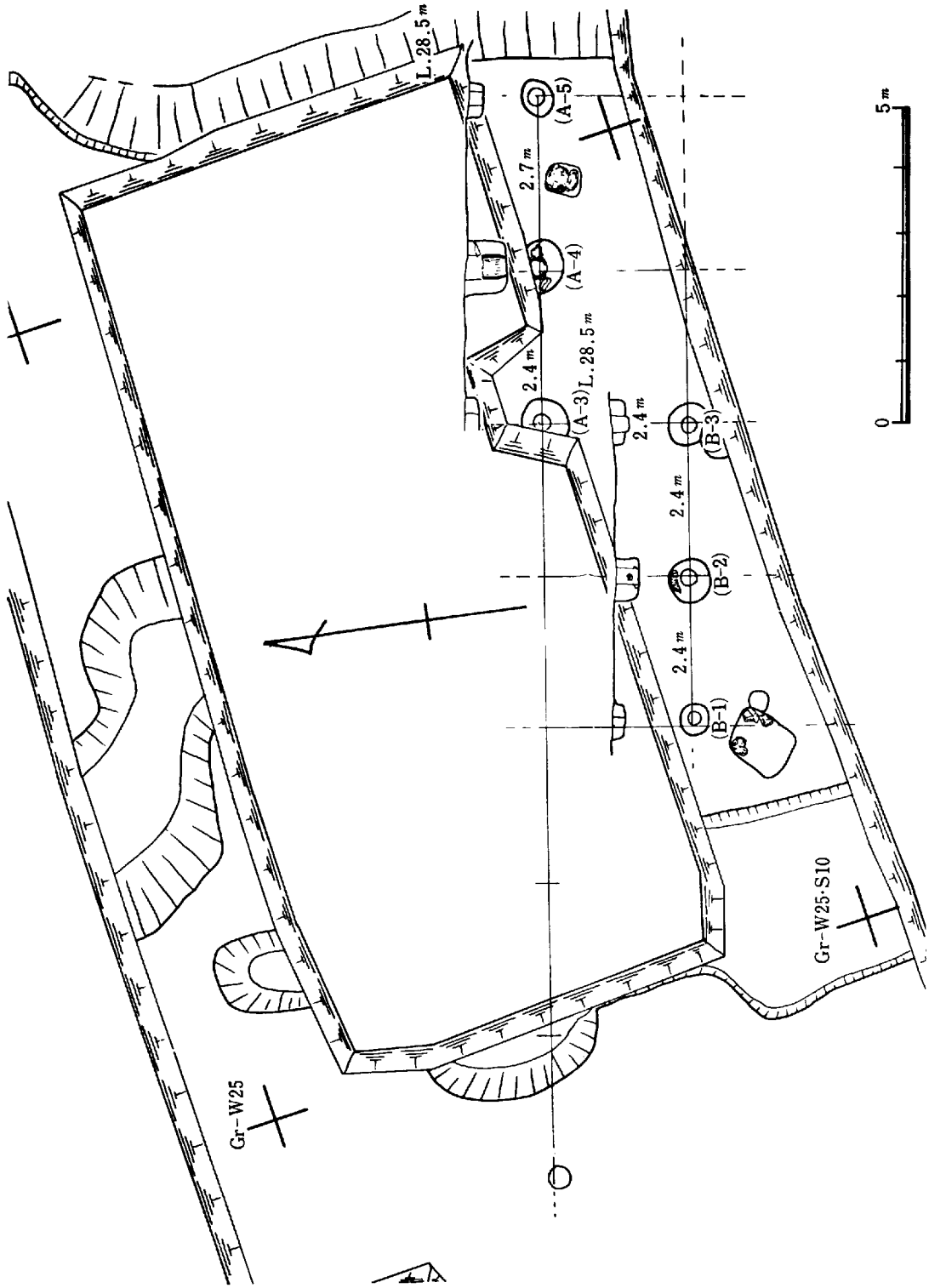
柱穴ロ－１は確認されなかったがイ列及び口列は廂の柱穴列となり、南、北両側に廂を持つ３間×６間もしくは梁行の中央に柱の存在を考えて、４間×６間の建物となると思われる。建物の方位は柱穴Ａ列によると南北方向に対して、北が５度20に偏している。柱の掘り方は直径50～80ｍの円形を呈し、柱痕跡は直径30～40ｍの円形である。いずれの柱穴においても柱根は暗灰色粘質微砂に置換しており立ち腐れの状態を示す。また、柱穴Ａ－３は柱根が一部残存する。ほとんどの柱穴には詰石と思われる角礫が存在し、柱穴Ｂ－１内よりは土師器の碗が出土する（第24図）。柱穴は重複しておらず建て替えはなかったと思われる。柱穴はいずれも約13ｍ×24ｍの基壇上に存在する。基壇はそのほとんどを花崗岩のバイラン土である地山を削り出し、また低い部分には暗茶褐色の粗砂を入れ上面を地山の土まじりの粗砂で固めて整形している。第４橋脚南側部分では地山を削り出した雨落ち溝も確認される。

基壇の周囲（第12図　網部分）は厚さ10～20ｍで炭、土器片まじりの暗褐色土層が堆積する。土器片は土師器の杯、有脚小杯を主とし、緑釉片、青磁片等も出土する。瓦片は少量であり、須恵器はほとんど出土しない。土器片の出土量は１ｍ四方で75㎝×40㎝の整理箱が一ぱいになるほどである。

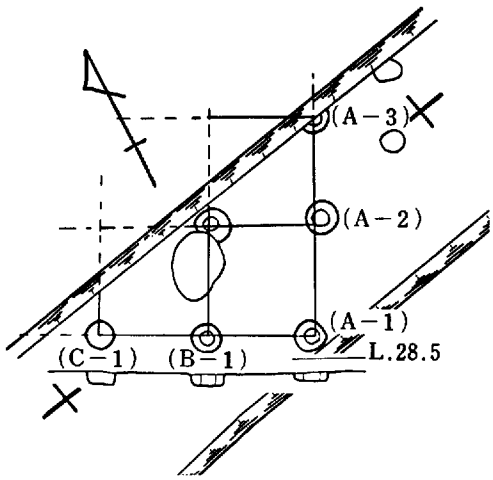
建物の西側部分および東側部分の一部は炭・土器片まじりの暗褐色土層が堆積しておらず、


L.28.5m
L.28.5m
(イ-7)
(5P-1)
(イ-6)
2.4m
(A-3)
2.9m
(A-4)
2.9m
(A-5)
2.9m
(A-6)
3.0m
(A-7)
L.28.5m
5.0m
(B-1)
L.28.5m
(B-6)
(B-7)
2.4m
(ロ-1)
(ロ-6)
(ロ-7)

第12図 建物Ⅰ平面図



第13図　建 物 Ⅱ 平 面 図　　縮尺100分の1



第14図　建物Ⅲ平面図　　縮尺100分の1

高さも周囲より一段高くなっている。西側部分には建物に接して溝が存在し、また柱穴等は確認されていないが建物の両側に回廊が存在していたとも考えられる。瓦片が周囲からさほど出土していないこと、柱が掘立柱であること等からこの建物は瓦葺きではないと考えられる。建物の北東部に存在する３個の礎石状の石は、建物Ⅰの建設時に削平・整地されて痕跡を示さない瓦葺きの建物の礎石かとも思われる。いずれも厚さ30～40㎝程度の偏平な石を用い、地山を掘り窪めた上に直接置かれている。柱座等の加工の跡は認められない。

建　物　Ⅱ（第13図）

建物Ⅰの南西に存する掘立柱の建物である。現在２列の柱穴列が確認される。建物の方位は建物Ⅰと同方向であり、柱穴Ａ－５を北に延長した線と建物Ⅰ・柱穴Ｂ列の延長線の交点と建物Ⅰ・柱穴Ｂ－１の心々距離は約5.7ｍである。建物Ⅰ・Ⅱが一定の地割の上に建設されていることがうかがえる。（註１）　柱間は一方が2.7ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍ＋2.4ｍの４間であり他方が2.4ｍ＋ｘである。柱の掘り方は径50～80㎝の円形を呈し、内に径30㎝程の柱痕が残る。いずれも地山の上に約30～50㎝の厚さで盛られた粗砂の整地層の上から切り込んでいる。柱穴Ａ－４には柱根が存在する。径40㎝程であり、周囲は面取りがなされている。

また、柱穴Ｂ－２には詰石の代わりとして、軒平瓦を入れている。平城宮6633型式類似のものであり、本遺跡の他の軒平瓦と同じものである。顎の下部分には赤色塗彩の跡が残る。柱穴Ａ列の西に延長した線上、柱穴Ａ－３より12ｍ（2.4ｍ×５）の所に柱根が残存する径約30㎝の柱穴が認められる。間に溝Ⅰ・Ⅱが存在すること、Ｂ列においては柱穴が確認されていないことから、建物Ⅱの柱穴になるか不明である。又、西側に根石と思われる石を持つ柱穴も存在する。

注１．東大寺、国分寺等が一定の地割により建設されていることは、石田茂作氏がすでに説かれていることである。本遺跡では発掘範囲がかぎられているため、その詳細な検討はできない。

石田茂作『東大寺と国分寺』1966.11,

建　物　Ⅲ（第14図）

建物Ⅰの北京に建物の南東部分が検出される。掘立柱の建物である。両方向とも1.4＋1.4ｍ＋ｘの２間ないしそれ以上の建物である。建物の方向は北25度40東であり、建物Ⅰ・Ⅱの方向

とは異なる。柱の掘り方は30～40㎝の円形を呈し、柱痕は径15～20㎝であり、深さは20～30㎝である。柱穴A－3底部より、須恵器の蓋・土師器の椀が出土する（第24図）。これらの土器によると建物Ⅰ・Ⅱより古い時期であり、瓦の時期と一致すると考えられる。

柱 穴 列　（第11図）

第2橋脚にて検出された南北方向の柱穴列である。柱間は2.7m＋2.7m＋xである。柱の掘り方は径30～50㎝の円形であり深さは10～20㎝である。柱痕は確認できなかった。柱穴は東が未掘のため東に伸び、建物になる可能性も否定できない。また、T1の溝とともに築地の遺構の一部とも思われる。

2. 溝

T1－溝　（第11図2）

北西・南東方向の溝が3本および南、北方向の溝が2本検出されている。いずれも巾30㎝～100㎝、深さ5～15㎝であり断面U字形を呈する。溝の底部が遺存しているものと思われる。溝内の埋土は暗褐色微砂である。遺物は出土していない。南北方向の溝2本はその方向が建物Ⅰ・Ⅱとほぼ一致する。方向が若干異るが第2橋脚・柱穴列とともに築地の遺構の一部とも思われるが定かではない。

溝　Ⅰ　（第11図1、第13図）

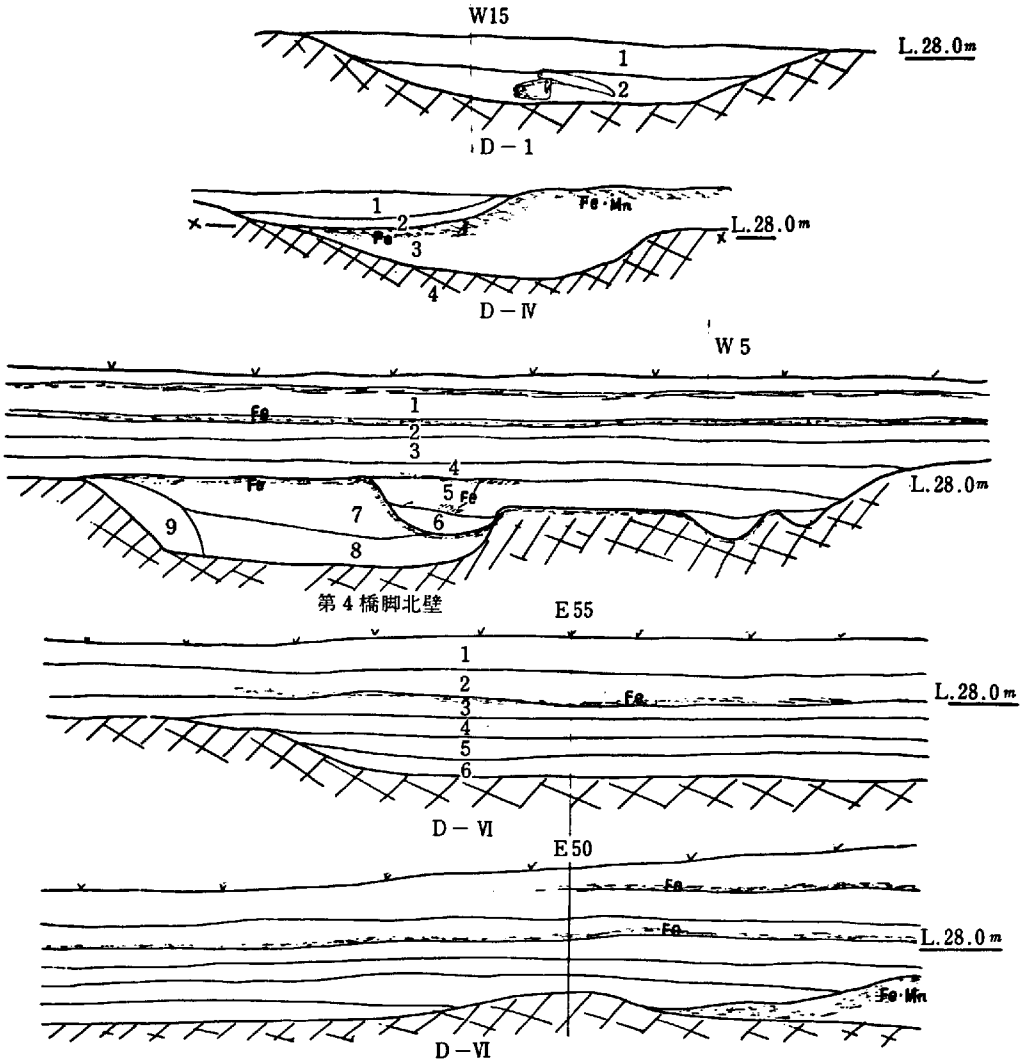
上面での巾約3m、深さ約40㎝の地山面を掘り込んで作られている断面U字形を呈する溝である。「S」状に曲折する。底部には厚さ約20㎝程、青灰色粘土が堆積しており、水が流れていたことを示している。遺物は須恵器・杯、土師器・杯、有脚杯、瓦、柱材等が出土する。軒平瓦と柱材は底部より重なった状態で出土する。（図版16）柱材は下部が存する。直径20㎝、底部側面は一ケ所面取りがなされており、上部は炭化している。又、軒平瓦にも二次焼成の跡が残る。ともに火災等にあったものと思われる。溝は北側が用地外、南側が保存部分となっているため、どのようになるか不明であるが，溝Ⅱと継がるかとも思われる。溝は南には伸びない。

溝　Ⅱ

溝Ⅰの西側および南西に検出される。溝Ⅱ、は溝の北端と思われ、深さ15㎝程であり、青灰色粘土は認められない。溝Ⅱ″は深さ30～40㎝、底部に青灰色粘土が堆積する。溝Ⅱ″からは土師器・杯、有脚杯、瓦等が出土する。

溝　Ⅲ

建物Ⅱの西側に検出された巾約3m、深さ15㎝程の溝である。建物Ⅱの柱穴等と同じく整地層の上より掘り込まれている。埋土は建物Ⅰ周辺と同じく、炭・土器片を多く含む暗褐色土層である。遺物は特には土師器・杯、有脚小杯が認められる。（第19図）瓦はほとんど細片であるが、単弁の軒丸瓦（第25図）、復弁の軒丸瓦が各1点出土している。建物Ⅱに関係する溝と

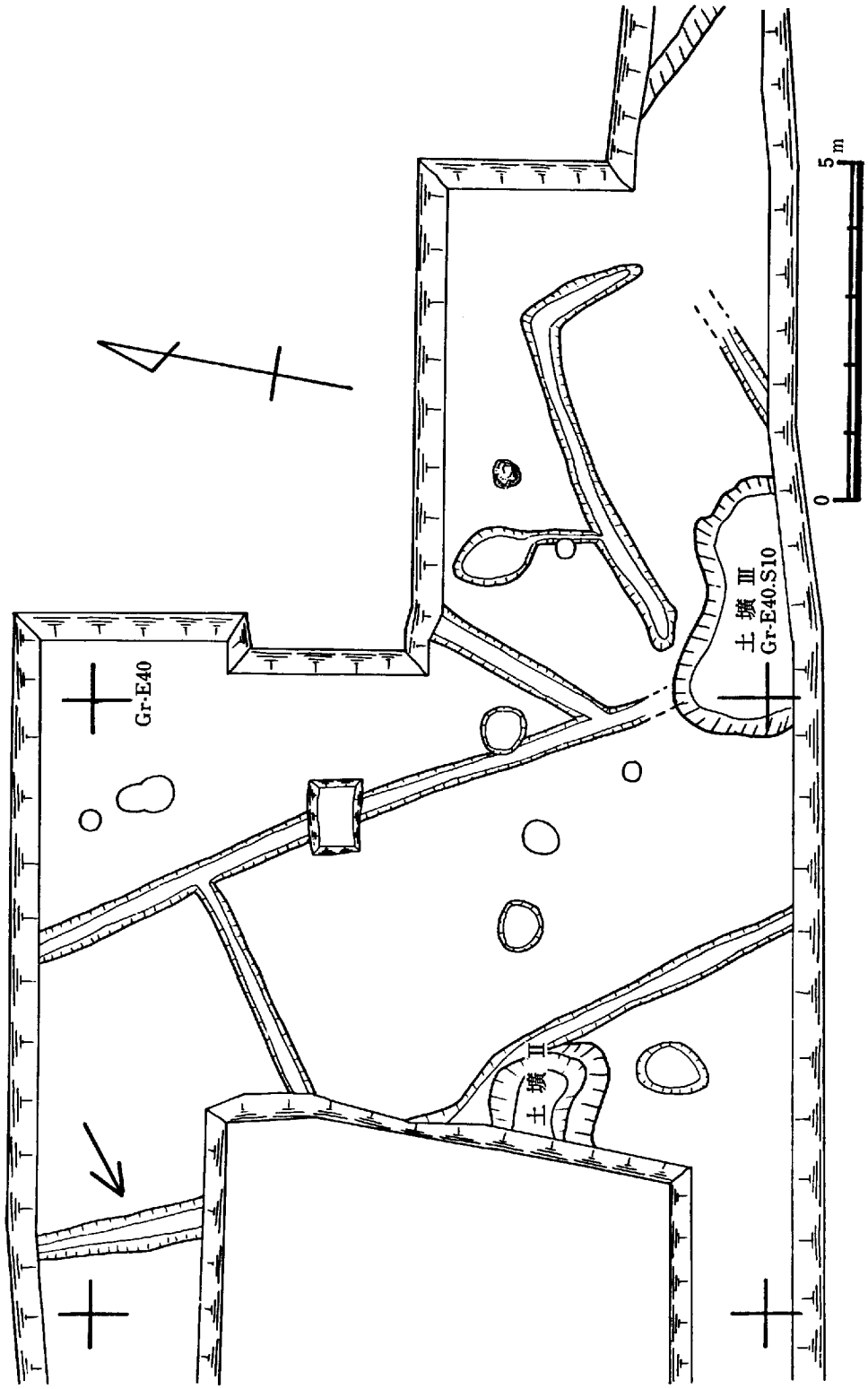


第15図　各溝断面図

思われる。又、溝 Ⅱ″との関係は北側が保存部分であり、末掘の為不明である。

溝　Ⅳ　（第10図）

第４橋脚西側に検出される。北側の西岸は「く」字状に西に曲折する。溝は二時期に分けられると思われる。地山を掘り込んだ巾２～３ m，深さ40㎝の溝が当初の溝である。この当初の溝に建物Ⅰ、Ⅱ等の整地面で認められた粗砂を入れ，巾 0.6～２ m，深さ 20～30㎝の溝としている。粗砂中よりは遺物がまったく出土していないため、当初の時期は不明である。第二の時期の埋土は建物Ⅰ周辺と同じ、炭・土器片混じりの暗褐色土層が続くため、層の区別はできない。しかし、西側中央付近は他に比して瓦の出土が目立つ。



第16図　第 6 橋 脚 平 面 図

溝　V　（第10図）

建物Ⅰの西側に接して検出される南北方向の溝である。南側は定かでない。巾約40㎝，深さ約15㎝であり，埋土に黒褐色砂が入る。遺物は出土していない。建物Ⅰにともなう溝かとも思われる。

溝　Ⅵ　（第10図）

発掘区域の東側に検出される。巾約7～9ｍ，深さ30㎝程の溝である。底部には厚さ10㎝程，青灰色粘土が堆積している。遺物は主としてこの粘土層中より出土する。瓦片の出土が目立ち土器類は少ない。溝は南北方向であるが北側の納屋が移転しておらず発掘ができないため，くわしくは不明である。東側の境をなす溝と思われる。

第6橋脚　溝　（第16図）

北西・南東方向の溝2本とこれに直交する，北東・南西方向の溝2本等が検出される。いずれも巾30～40㎝，深さ20～30㎝であり，埋土にマンガンを含む黒灰色土が入る。この埋土は本遺跡の他の遺構のものとは異る。遺物は矢印の溝より弥生時代中期の土器片が出土としている。（第16図）他の溝には遺物がまったく含まれていない。遺構の性格等も不明である。

3. 土　壙

土壙Ⅰ　（第17図）

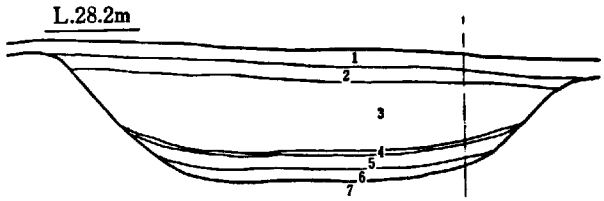
第4橋脚の南側、中央に検出される、巾約2.5㎝、深さ60㎝の土壙である。南側は用地外となっているため、その全形は不明である。溝の可能性も否定できない。底部近くに厚さ3㎝程の炭混じりの層があり、遺物はこの付近より特に集中して出土する。土師器の坏が主体である。土層は粗砂が入り上面を地山混じりの土で固めて整地している。この上に建物Ⅰ周辺に認められる炭・土器片混じりの暗褐色上層がかぶる。したがって、この土壙は、建物Ⅰの廃絶期以前のものと思われる。

土壙Ⅱ　（第16図）

第6橋脚南西部に検出される巾1.5ｍ，深さ60㎝程の土壙である。肩の部分は二段となっており、埋土には暗褐色微砂が入る。遺物は土師器・杯，蓋等および須恵器・杯が出土する。又、周辺より底部に「馬」の字のある盤も出土している。（第24図）焼成の良い、胎土の緻密な土師器はこの土壙と周辺および第3橋脚西側で少量出土するのみである。建物Ⅲに先行し、一連の遺構の初現の時期を示すものと考えられる。

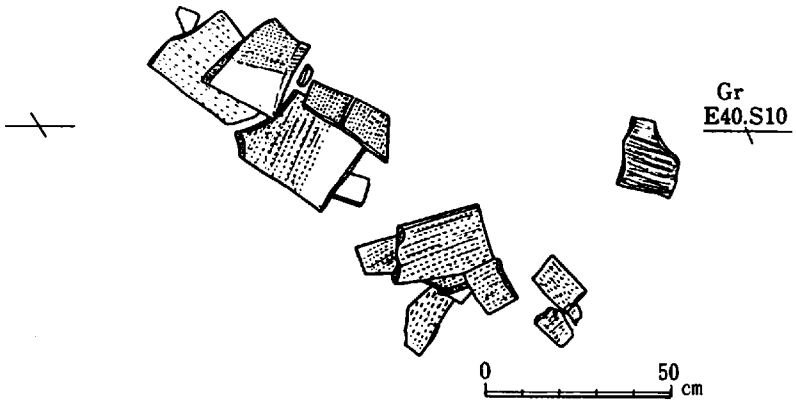
土壙Ⅲ　（第16図）

第6橋脚南側に検出される。深さ20㎝程の楕円形を呈する土壙である。埋土にマンガン混じりの暗茶褐色が入る。遺物は瓦がまとまった状態が出土している他、（第19図）土師器・杯等が認められる。

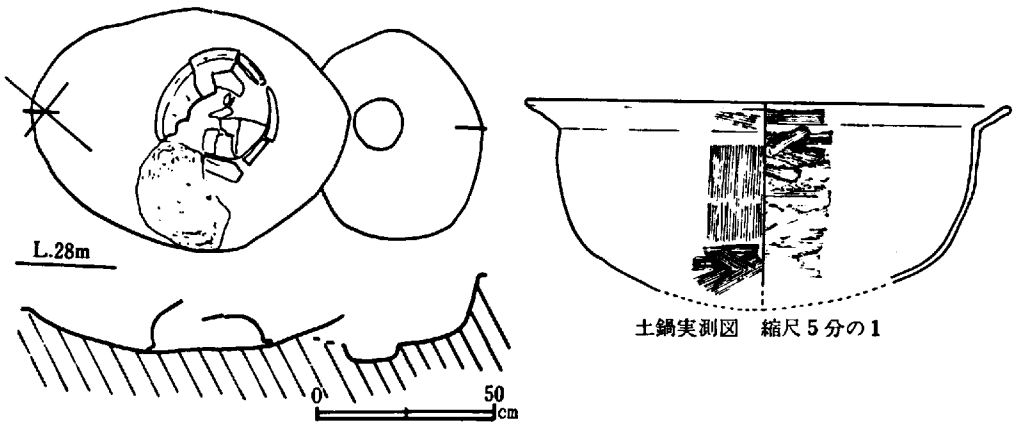


第17図　土 壙 Ⅰ
縮尺40分の 1

第18図　土壙Ⅱ断面図



第19図　土壙Ⅲ、瓦出土状態



第20図　土 壙 Ⅳ 実 測 図

土 壙 Ⅳ　（第20図）

建物Ⅲ・柱穴Ｂ－２を切って作られており、土鍋が出土する。鎌倉時代のものと思われる。土鍋は表面に荒い刷毛目と細い刷毛目，裏面に細い刷毛目が認められる。胎土は緻密である。表面にはススの付着がいちじるしい。

第３節　遺　　物

1.　土　器

出土した土器類は奈良時代、平安時代のものがその大半を占め、その他に弥生時代中期、中世のものが少量出土している。

奈良時代のものは土師器（第24図１～９）が主に出土しており、須恵器は少ない。土師器は土壙Ⅱおよびその周辺と第３橋脚南西側と、その出土地点は限られて出土しており、他の地点では出土していない。須恵器は建物Ⅲの柱穴および建物Ⅰ周辺の暗褐色土層中より平安時代の土器類に混じり少破片となって出土しており，他に瓦片とともに調査区全体で出土する。

平安時代の土器類は土師器の杯、有脚小杯がそのほとんどを占めており、他に須恵器片が若干、緑釉陶器片１片、青磁片数片、陶硯片２片が出土している。土師器の杯、有脚小杯は主に溝Ⅲおよび建物Ⅰ周辺の暗褐色土層中より集中して出土する。

中世の土器類は土壙Ⅳより土鍋が、他に土鍋片が若干調査部分東側で出土する。

弥生時代中期の土器片は第６橋脚溝中、および第１橋脚で出土する。いずれも遺構には伴なわないと考えられる。

須 恵 器　（第21図１～17、第23図17・19・20、第24図10）

蓋（第21図１～５、第23図19・20）は天井部にヘラ削りがなされており、偏平な宝珠の退化した形のつまみがつく。口縁部は強く屈曲するくせをもつものともたないものが認められ、器高も高いものと低いものとの二種が認められる。

１が灰白色を呈し、やや軟質であり、他は青灰色を呈し、堅緻である。椀（８）は底部に外傾する高台がつき、体部は内湾気味である。内外面全体にナデ調整が行なわれている。緻密で軟質の焼成である。９・13は体部との境を若干凹ますことにより底部を作る。底部はヘラ削りがなされる。盤（11・12）は底部をヘラ削りした後に高台をつける。高杯は長脚のもの（14）と短脚のもの（15・16）の二種が認められる。16の脚端部は強く屈曲するくせをもつ。14は焼成があまい。椀（17）は灰色ないし灰黒色を呈し、内外面の一部に自然釉が認められる非常に堅緻な焼成である。底部には糸切り痕が残り、高台は削り出し高台様にしたつけ高台である。体部は外側に開き、中央に一条の突帯がつく。糸切り痕の認められるものは本例のみであり、又、焼成・胎土とも他とは異なる。杯（第23図17）は堅緻な焼成であり、体部はナデ整形がなされ、底部はヘラ削りがなされる。椀（第24図10）は底部にヘラ削りの後、高台をつける。やや軟質の焼成である。

土 師 器　（第21図18～41、第22図１～35、第23図１～６、第24図１～９）

杯（第11図18～41、第22図１～13）。器形は体部と底部との境を明確にした削り出し高台様の底部をもつものともたないものとの２種に大別できる。又、21図21～23が暗褐色を呈し、堅い焼成である以外は灰褐色又は灰白色を呈し、緻密で軟い焼成のものである。第21図19～23は体部との境部分をヘラにより整形し、底部を明確に区別をしており、内外面はナデ調整が行なわれている。底部は特に調整が行なわれておらず、22では粘土巻き上げ痕が認められる。第21図24～41、第22図１～13は体部と底部との境にヘラ削りが一回転ほどなされ、角が取られている。表面が磨滅しているため、確認しにくいが赤色塗彩の認められるものも存する。（第21図24・30、36、40・第22図３）、

有脚杯は大型のもの（第22図14～17）と小型のもの（第22図18～35）とに大別できる。いずれも杯に別作りの脚を取りつけたものであり、脚は高く、脚端部がやや内湾する特長をもつ。坏部は皿状を呈するものと、やや深みをもつものとがある。杯部、脚部ともナデ調整がなされており、赤色塗彩のあるものも認められる。（第22図25・27）底部に糸切り痕は認められない。29を除さ、灰白色を呈し、焼成・胎土は前述の杯と同様である。29は褐色を呈する堅い焼成のものである。

椀（第23図１～16）は体部が屈曲するもの、やや内湾するもの、外に開くもの等が認められる。高台は高く、しっかりしているものが多い。いずれもつけ高台であり、内外面ともナデ調整が行なわれている。１・４は暗褐色を呈し、他は灰白色ないし灰褐色を呈する。いずれも精製した粘土を用い、やや軟質の焼成である。２・４・６には赤色塗彩が認められる。第23図18は粗い砂粒を含んだ褐色を呈するやや軟質の焼成のものである。

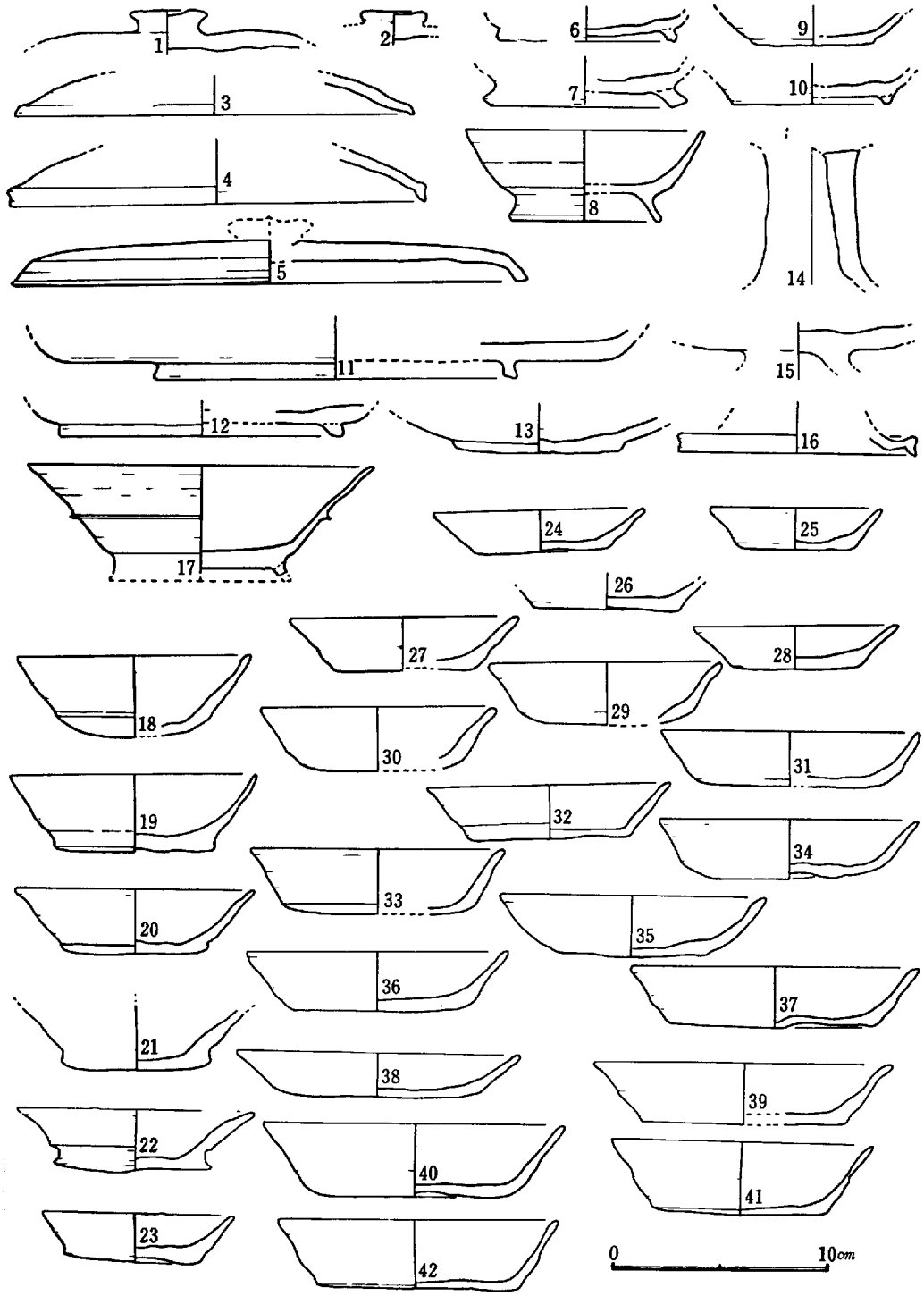
第24図１～９は良く精製された粘土を用いた堅緻に焼成されたものである。黄褐色を呈し、いずれも赤色塗彩がなされている。蓋・杯・盤・椀が存在する。１の底部外側中央に付近には「馬」の文字が彫り込まれている。２は天井部にヘラ削りが行なわれており、３はヘラ磨きが行なわれている。４～９の体部中央から底部にかけてはていねいなヘラ磨きが行なわれており、口縁部付近はナデ調整がなされる。２には波状・放射状・螺旋状、３には波状・螺旋状、８には放射状・螺旋状の暗文がそれぞれ組み合せてほどこされている。他のものは表面の剥離がいちぢるしいため、暗文の確認はできない。

陶　硯

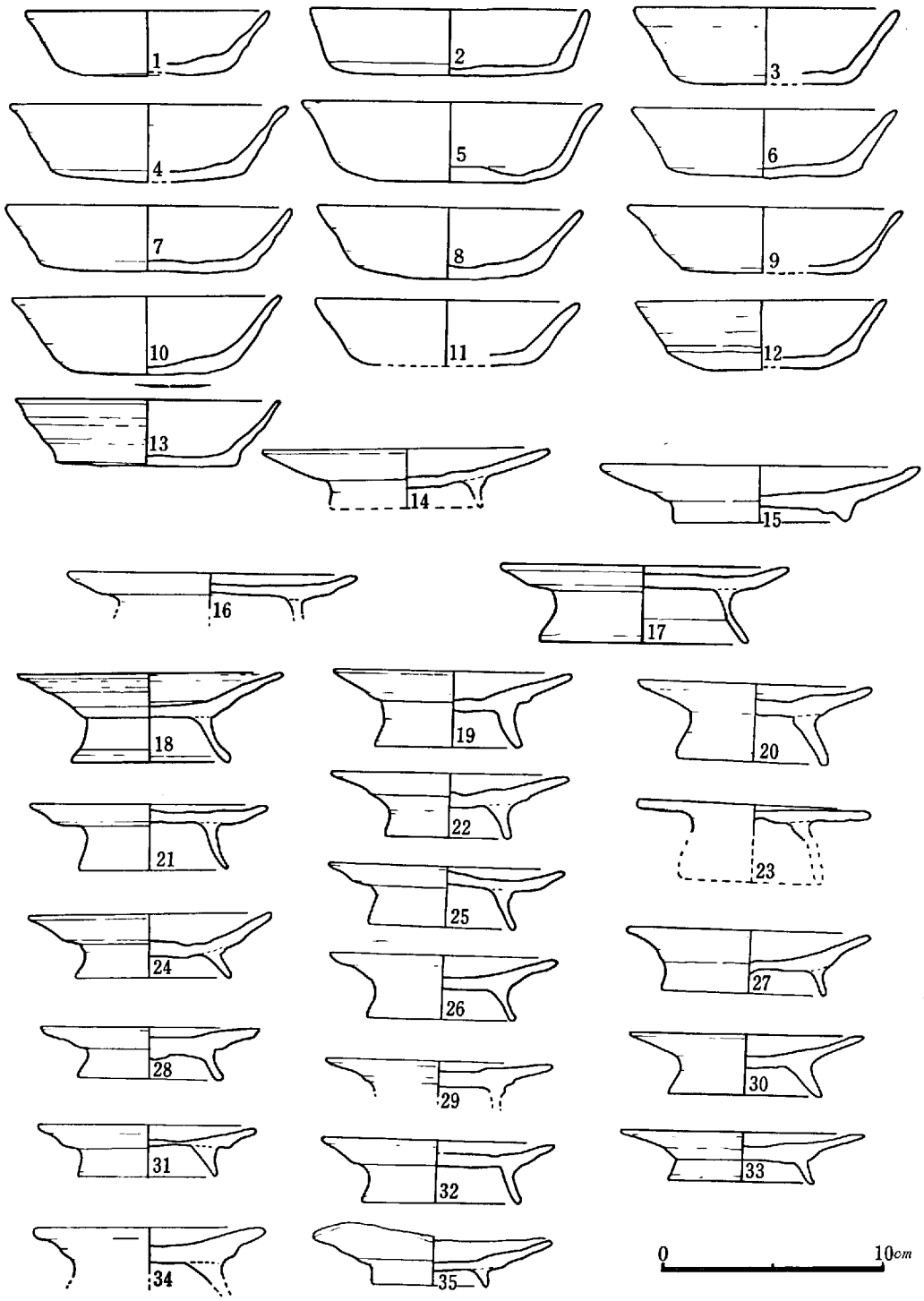
円面硯、風字硯の破片が各１片ずつ出土している。いずれも小破片である。円面硯は方形の透しを持つ脚部破片と考えられるものであり、緻密なやや軟質の焼成である。風字硯は陸部角の破片であり、堅緻に焼成されている。

弥生式土器　（第23図21～23）

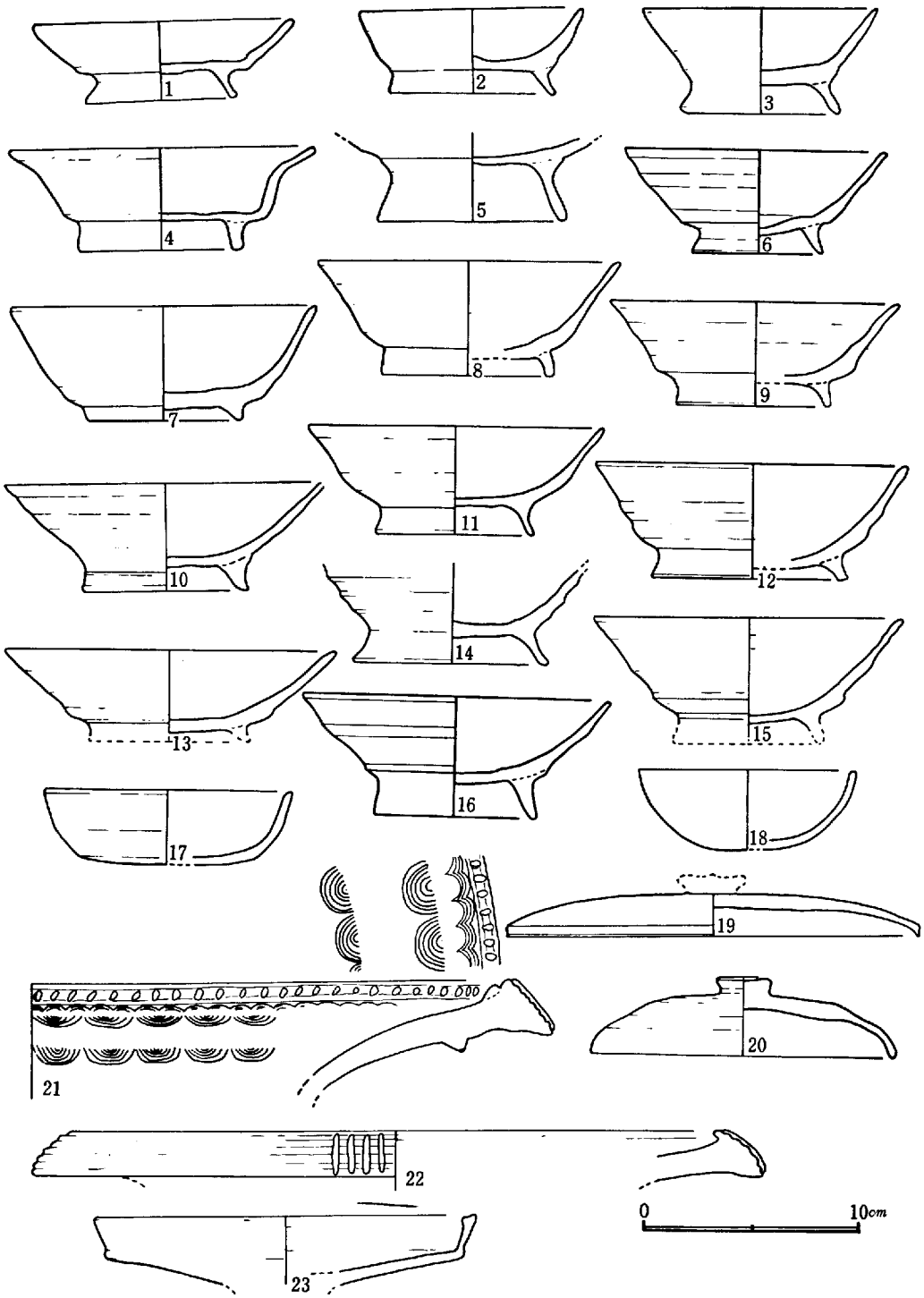
21、22は壺あるいは器台になると思われる。口縁端面に棒状の貼り付けを持つ。21には口縁内面に櫛描の半楕円文が画かれる。23は高杯の杯部と思われる。



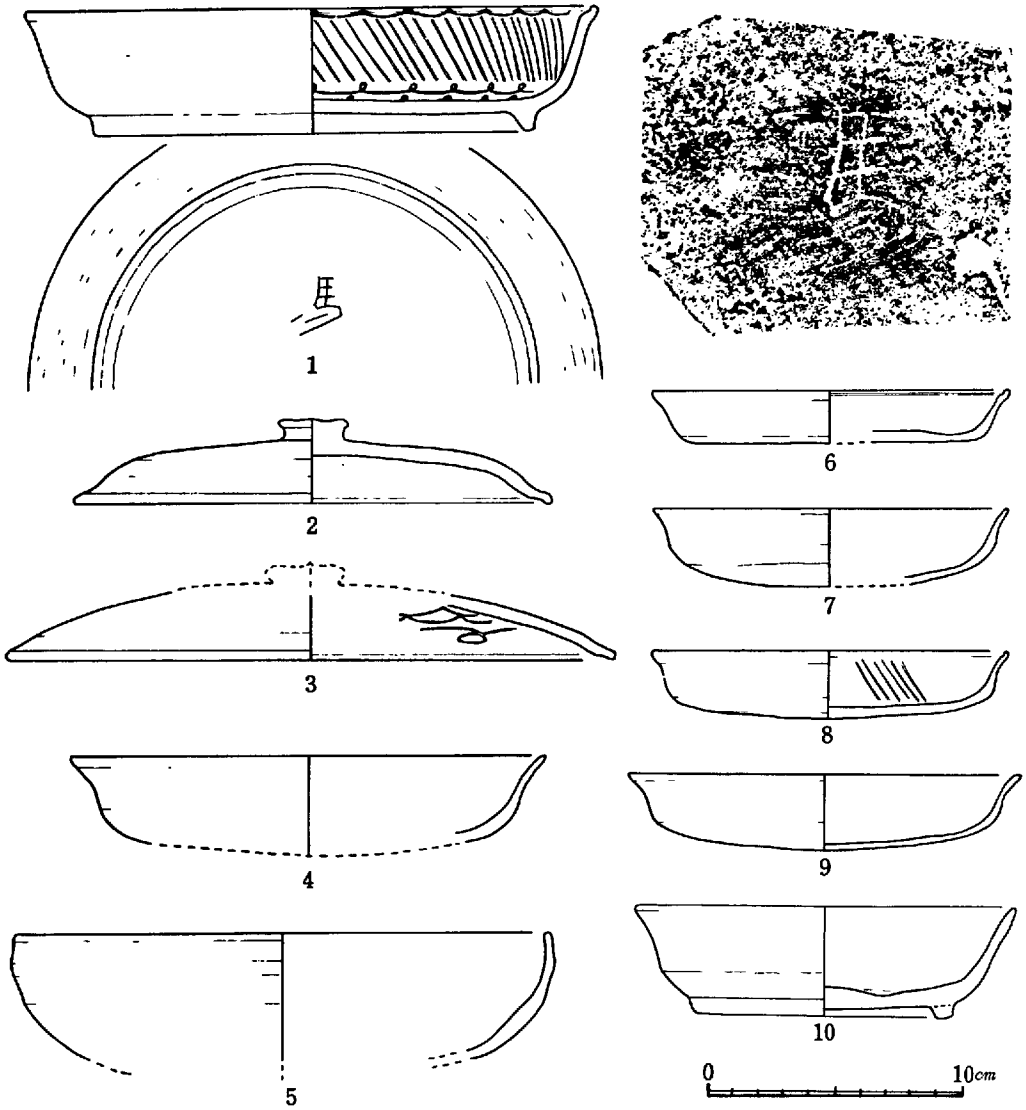
第21図　出土土器実測図



第22図　出土土器実測図



第23図　出土土器実測図



第24図　出土土器実測図

出土位置	土器図版番号	出土位置	土器図版番号
第2橋脚	21—11・12	建Ⅰ柱B—7	21—20
第3橋脚	21—3・14・15・31	〃 柱イ—7	21—23
第4橋脚(建Ⅰ・南)	21—2・4・6・9・10・16・17・17・20・30・33・34・42 23—8・11 22—1・4・12・16	建Ⅱ柱A—4	22—29
〃 西	21—13・28、39、22—7・13・14・15・22・27、23—1・2・3・4・6・16	溝Ⓓ—Ⅰ	21—7・8　2—11
第5橋脚(建Ⅰ・北東)	21—1、19、22—21・23・24・25・26・28・35	溝Ⓓ—Ⅱ	21—21・29、2—11・19・20・24・28・31・34、3—5・15
第6橋脚	21—5・22・27・38	土壙Ⅰ	21—35・36・37・40・41 22—3・5・6・9・10
第5橋脚柱—1	23—10	土壙Ⅱ	24—1～10
建Ⅰ柱B—1	23—13	建Ⅲ柱A—3	23—17～20

2. 瓦

瓦片は全体で約4350片ほど出土しており、その詳しい分類は整理時間の関係でできていない。平瓦を主体とし丸瓦が数十点、軒丸瓦が８点軒平瓦が23点認められる。建物周辺等に転落した状態を示すものは認められない。わずかに土壙Ⅲにおいて軒平瓦２点と平瓦が数点まとまって出土しているのみであり（第19図・図版19）他は小破片がややまとまって出土し、この中に軒丸瓦、軒平瓦が時折、混じって出土するにすぎない。瓦片が特に集中して出土する所は第３橋脚西部、第４橋脚西部・第６橋脚であり、これら瓦片とともに出土する土器は、土師器・坏、有脚小坏等である。軒丸瓦・軒平瓦とも二型式のみの出土であること、平瓦においても布目・縄目のものを主とすること、建物Ⅱ一柱穴内に軒平瓦が検出されること等から、瓦を使用した建物が存在した時期は短時間であったと思われる。また発掘区の南側に瓦を使用した建物が存在したと考えるより、建物Ⅰ・Ⅱの位置に瓦を使用した建物が存在しており、その跡に建物Ⅰ・Ⅱが建てられたと思われる。これは礎石・根石らしい石の存在、建物Ⅰが掘立柱による建物であるのに基壇が存在すること、瓦の出土状態等から推測される。

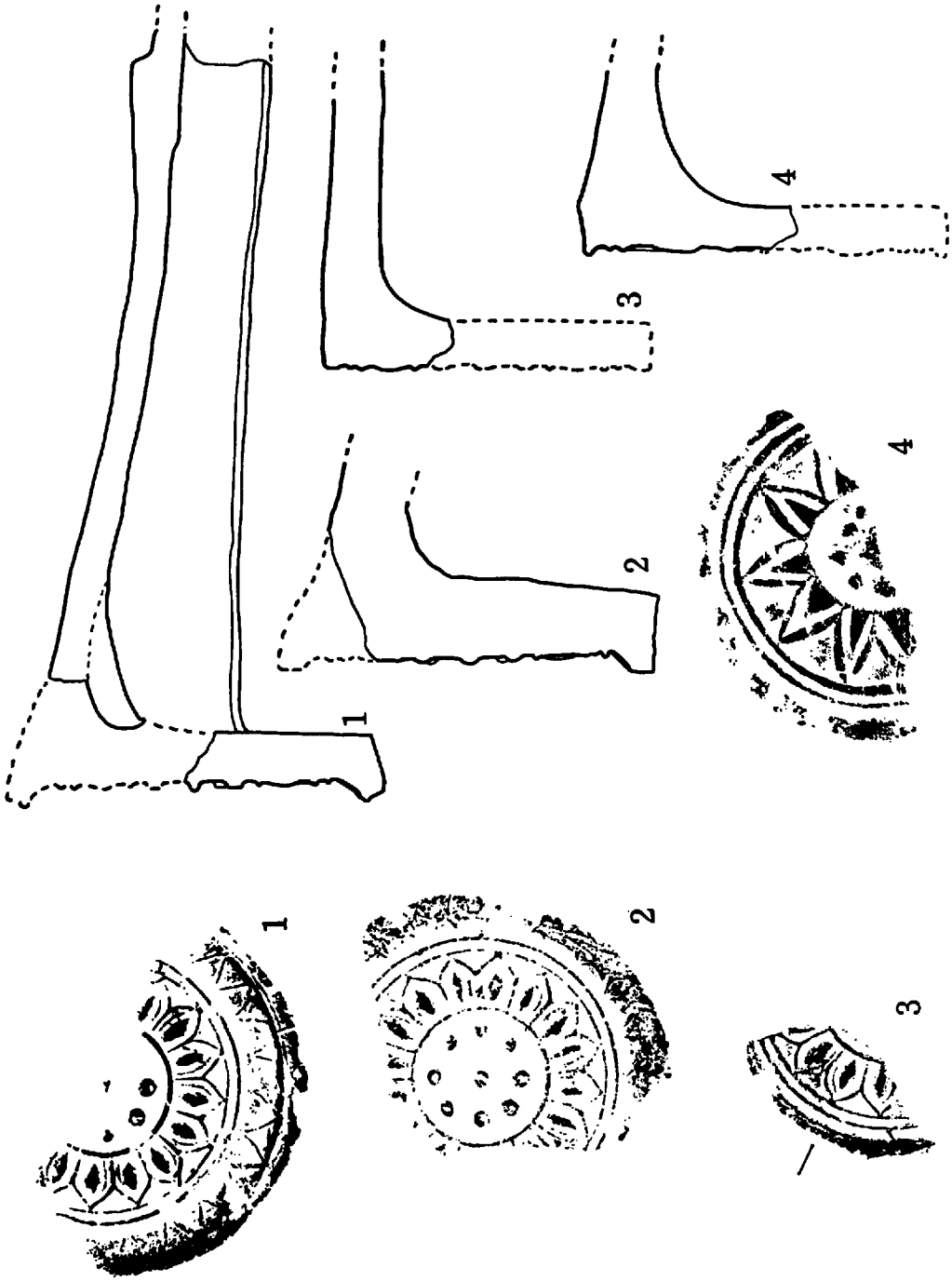
軒丸瓦　（第25図１～４）

二型式認められる。一は以前より確認されていた平城宮6225型式類似のものであり、７個体分出土する。同様の型式のものは金光町占見廃寺より出土している。（注１）周縁の形状により次の３種類に分類される。范が摩滅しておらず外区の鋸歯文が明確なもの（第25図１）。周縁が一回り小さく削られ外区に鋸歯文が半分ほど残るもの（第25図２）。周縁がほとんど削られ、わずかに鋸歯文の跡が残るもの（第25図３）。この三種類は、周縁が削られているもの程、范の摩滅がいちじるしいことが確認される。范の損傷等により、周縁を削ったとも思われるが、また形状が小さくなることから築地瓦として使用されたとも思われる。１によると瓦当一径6.5㎝、厚さ3.8㎝、内区中房径６㎝・蓮子１＋８・弁区幅2.4㎝、外区一内縁幅4.3㎝・外縁幅1.3㎝・線鋸歯文である。いずれも石英等を含み、３がやや破質であるが、焼成は良い。

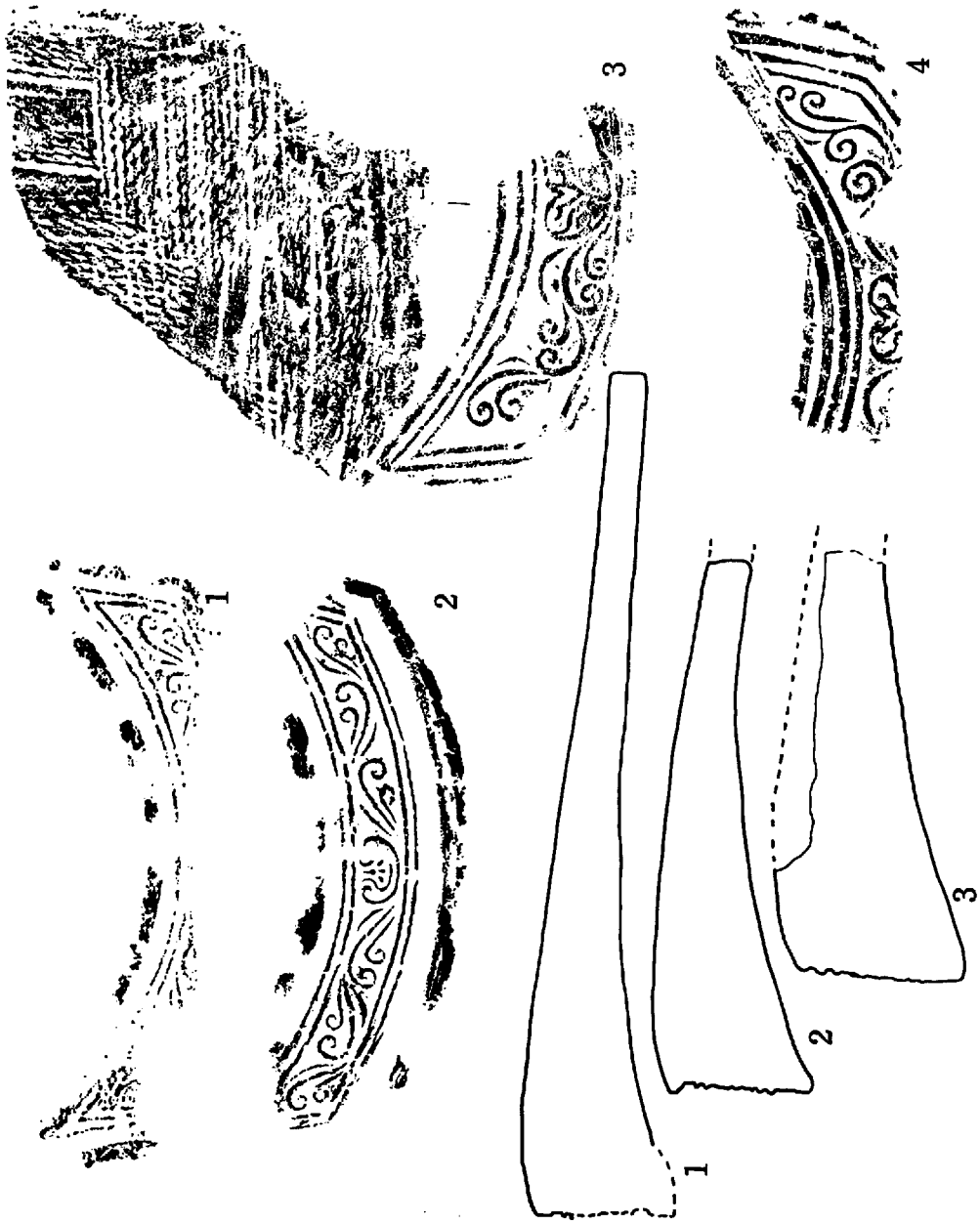
他の一型式は溝Ⅲより１点出土する。単弁蓮華文になると思われ、またその寸法等は瓦当一径7.5㎝・厚２㎝・内区中房径５㎝・蓮子１＋８・弁区幅3.3㎝、外区一内縁幅1.1㎝・外縁幅1.2㎝となると思われる。暗灰色を呈し、胎土に石英を含む。焼成は良い。瓦当面、丸瓦部上面に赤色塗彩の跡が認められる。

軒平瓦　（第26図１～４）

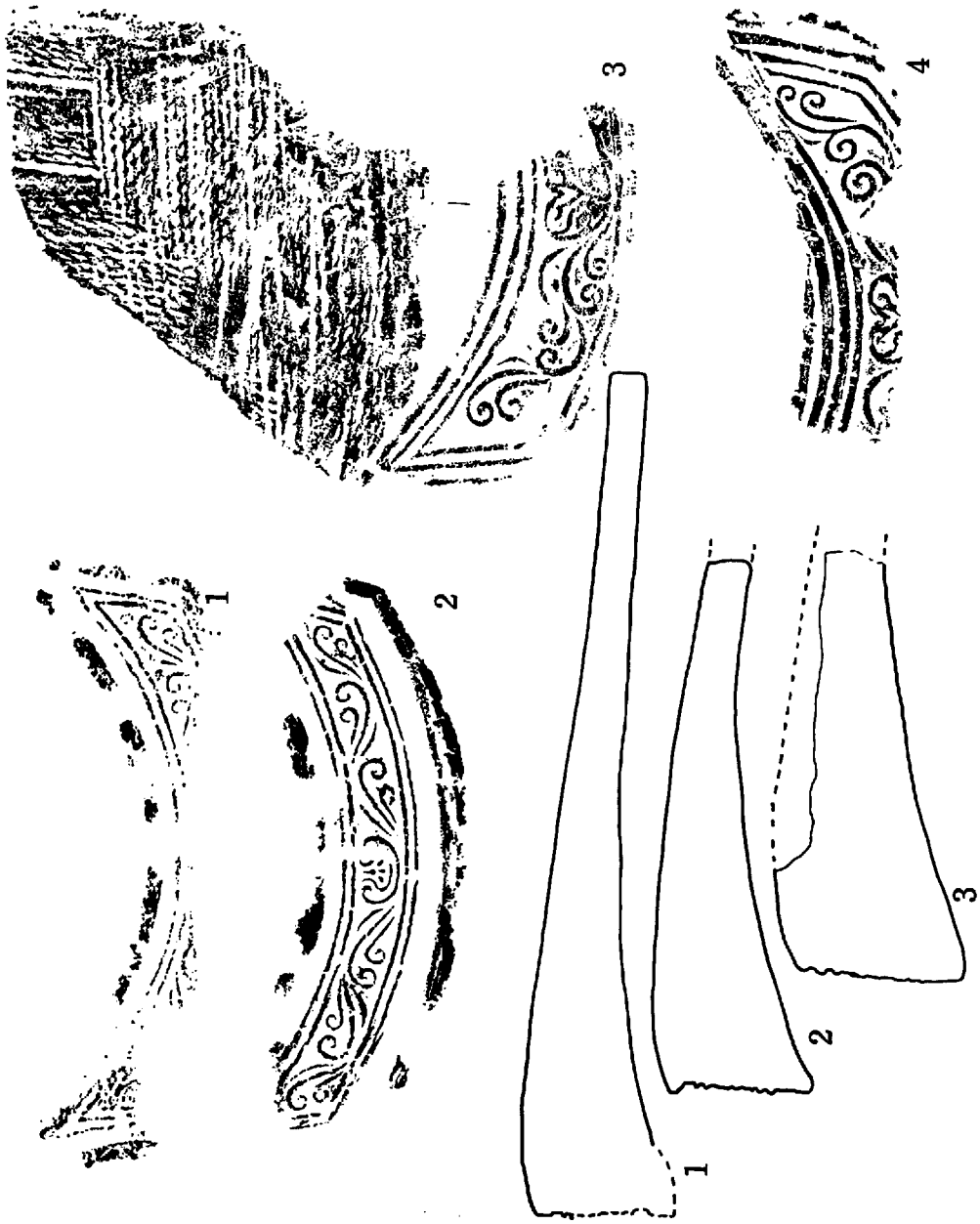
軒丸瓦と同様二型式認められる。一は軒丸瓦6225型式に伴なう、平城宮6633型式類似の均整唐草文のものである。（１・２）21点出土している。瓦当厚6.5㎝、曲線類、上弦幅25㎝、下弦幅24.8㎝、全長24㎝である。いずれも胎土に石英・長石等を多く含む、焼成は良好である。本遺跡のものは中央部分の文様が となることが特徴である。また、顎部全面および縄目との境部分に線状に赤色塗彩の認められるものも存する。前述した軒丸瓦、後述する丸瓦、平



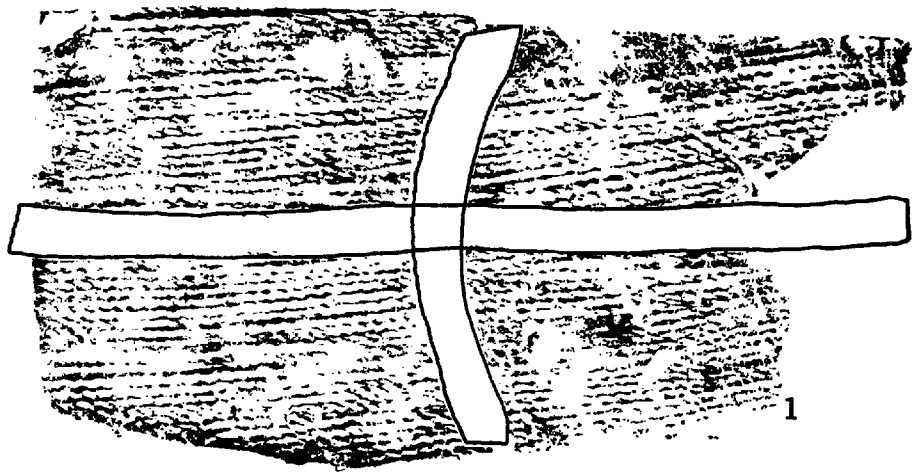
第25図　軒丸瓦実測図　　縮尺3分の1

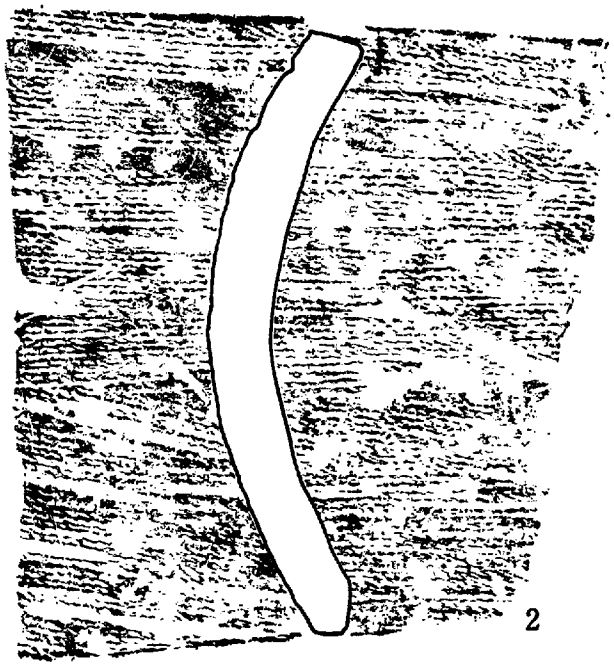


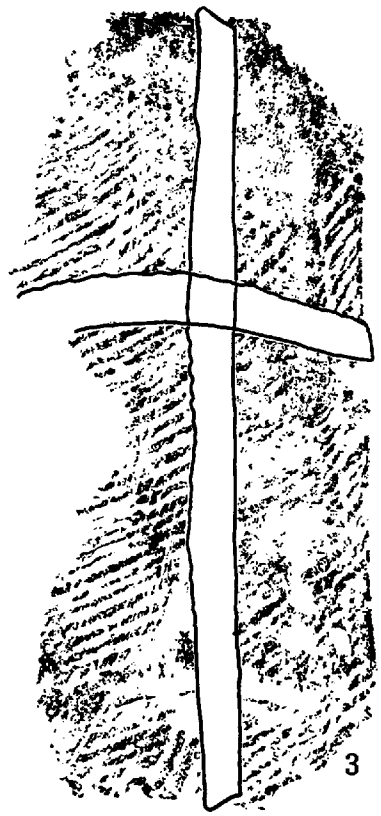
第26図　軒平瓦実測図　　縮尺3分の1



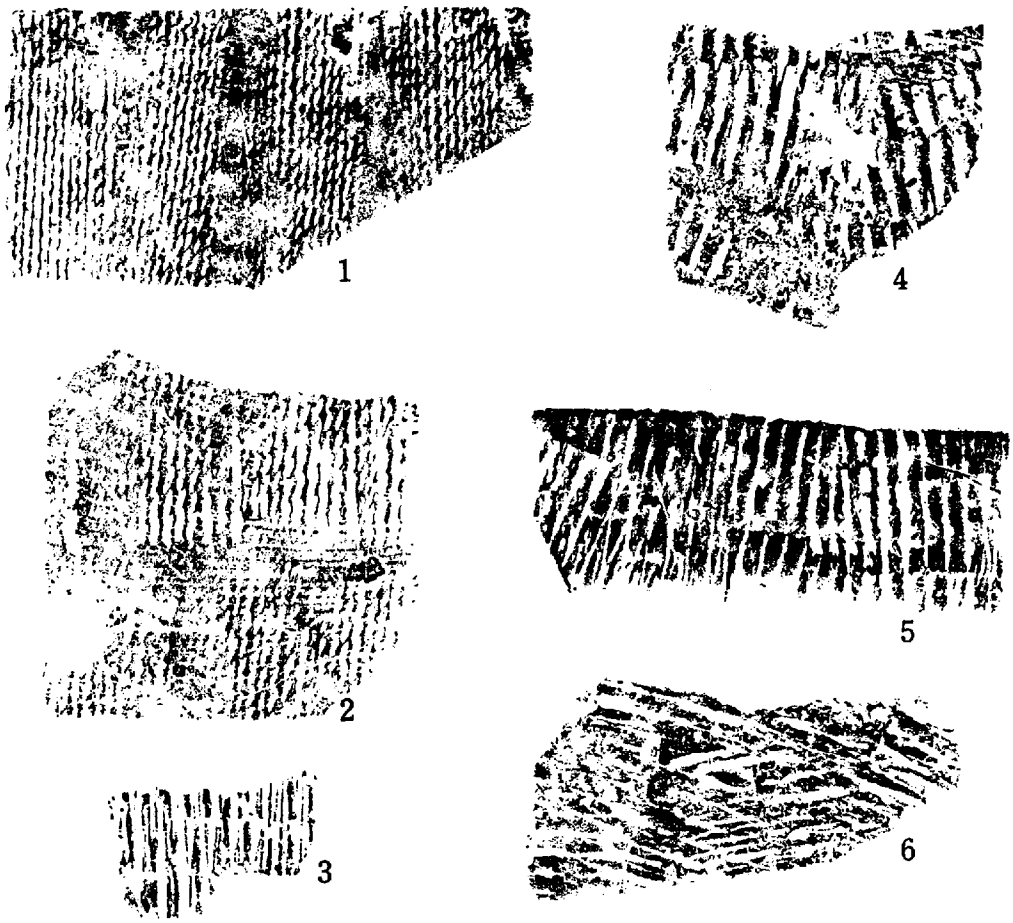
第26図　軒平瓦実測図　　縮尺3分の1







第27図　平 瓦 拓 本　　縮尺3分の1



第28図　平瓦、叩き目拓本

瓦にも赤色塗彩が認められるものが存することから、これらがセットをなして赤瓦の屋根を構成していたと思われる。また、赤色部分の認められるのは顎部のみであるから、屋根木質部を赤色に塗彩する際に付着したとも考えられる。

他の一型式は第４橋脚西部より２点出土した同じく均整唐草文の瓦２点である（３・４）。彫りは太く浅い。この出土位置の東１ｍよりに6633型式類似の軒平瓦が出土する。瓦当厚　cm曲線顎であり、胎土に石英等を含み、焼成は良好である。

丸　瓦

出土総数は整理中のため不明であるが、玉縁のものが10数片、行基葺きのものが10片内外認められる。いずれも裏面に布目痕が残る。玉縁のものは玉縁長　cm、段は明確である。軒丸瓦の瓦当の欠失したものとも思われるが、表面に赤色塗彩が認められるもの１点がある。

平　瓦

表面に布目痕、裏面に縄目痕が残るものを主体とする（第27図）。灰色ないし黒灰色を呈

し、胎土に石英等を含み焼成の良いものが特に認められる。褐色を呈するもの、焼成が軟質のものは少ない。

他に荒い縄目痕を持つもの、条線状の叩き目が残るもの等が存する（第28図）。これらはいずれも十数片認められるにすぎない。条線状の叩き目をもつものは4種類認められる。他に端瓦と思われるもの、築地瓦と思われる厚さが薄く形状が小さいものが認められる。また、布目、縄目痕が残るもので、表・裏面とも赤色塗彩がなされているものも認められる。

注1．西岡憲一郎氏蔵。西岡憲一氏、間壁忠彦氏の御教示による。

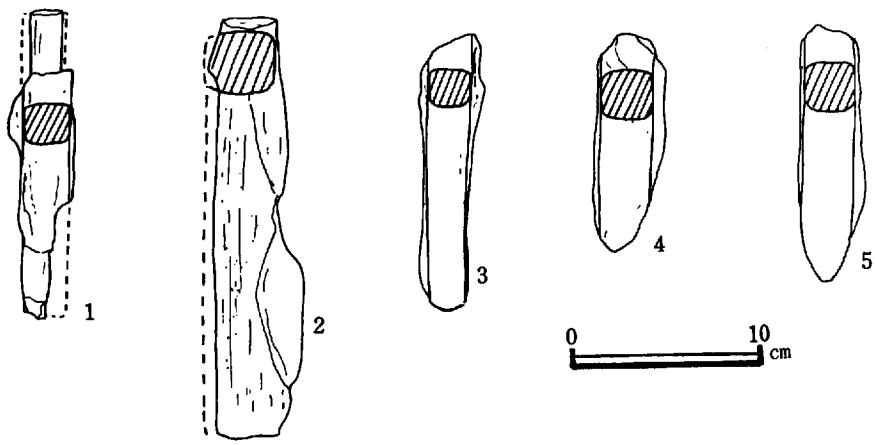
3. 鉄製品

鉄　釘　（26図）

建物Ⅰの南西部、炭、土器片混じりの暗褐色土層より出土している。形状の判明するもの6点、他に小片となっているもの数点が出土する。いずれも頭部、先端部は欠失しており、茎（なかご）の中央部分のみ残る。断面が1辺2㎝、8㎜の方形を呈する。

軒丸瓦	溝　Ⅰ	1	丸瓦・平瓦	第6橋脚	2	丸瓦・平瓦	建物Ⅱ・柱穴―B―2	1
	溝　Ⅲ	1		第5～第6橋脚間北側	2		建物Ⅱ・柱穴―B―3	2
	第2橋脚	1		溝　Ⅰ	103		第1橋脚	27
	第3橋脚	3		溝　Ⅱ	219		第2橋脚	153
	第5橋脚(建物Ⅰ東)	1		溝　Ⅵ	63		第3橋脚	553
軒平瓦	溝　Ⅰ	1		土壙Ⅰ	39		第4橋脚	1824
	溝　Ⅲ	1		土壙Ⅱ	86		第5橋脚	309
	建物Ⅱ・柱穴-B-2	1		建物Ⅰ・柱穴―イ―7	5		第6橋脚	366
	第4橋脚（建物Ⅰ南西部）	12		建物Ⅰ・柱穴―A―7	3		第5～第6橋脚北側	464
	第5橋脚（建Ⅰ―北東部）	2		建物Ⅱ・柱穴―A―4	3			

瓦出土位置一覧表



第29図　鉄製品実測図

ま と め

予算の都合上で報告書費用入札の時期が限定されたため、報告書は正味、二週間の期間に作成しなければならないことになった。このため整理が十分でない部分が存するが、この点は今後の機会を持ちたいと考えている。ここでは発掘により明らかにされたと思われる点について列挙する。

遺構の区割、配置について

建物は三棟検出された。建物Ⅰの中軸線および、現在の地形を検討すると、約100 m四方の区画を南北ともに3等分し、9坪に分けその北西側の4坪、または西側6坪に中心建物群を配置しているのではないかと考えられる。

建物の配置は建物Ⅰ・Ⅱによると寺院の配置とは考えにくい。建物Ⅱが南に伸びるか確認されてはいないが、南に伸びると考えればその配置は官衙的な配置になると思われる。

各遺構の時期について

本遺跡より弥生時代中期の土器片も出土している。付近に弥生時代中期の遺跡の存在が考えられる。

毎戸遺跡が寺あるいは郡衙、駅里として成立した初期の時期は土壙Ⅱの時期（奈良時代前期）と思われる。整備された時期は建物Ⅲの時期（奈良時代後期）であり、出土している瓦類もこの時期に造営された建物に葺かれていたものと考えられる。これらの瓦葺の建物が倒壊後、整地作業の後、建物Ⅰ・Ⅱが造営されたものと思われる。明確な瓦溜も検出し得なかったこと、建物Ⅱ柱穴内に詰石の替わりとして軒平瓦が入っていることもこのことを示していると思われる。また、土壙Ⅰは建物Ⅰ、の廃絶期を示すと考えられる炭、土器片混じりの暗褐色土層下に検出されているが、建物Ⅰ・Ⅱと近接した時期と思われる。建物Ⅰ・Ⅱの廃絶期は出土土器等から平安時代前期、もしくは中期にまで下ると思われる。

第４章　毎戸西方遺跡の調査

第１節　調査の概要

毎戸西方遺跡は小田郡矢掛町大字浅海字毎戸に位置する。毎戸遺跡と同じ、蔦山の南に形成された谷の西斜面に存在する。毎戸遺跡よりは西へ100ｍの所に位置する。発掘部分は二段の平坦な水田または畑地として使用されている部分と、これに続く桑畑として使用されている緩斜面および尾根頂部までの斜面であり、東西約100ｍの範囲である。尾根の西側の斜面にも、土器片の散布が認められ遺跡の存在が考えられたが、この部分は既に工事が終了している。土器片は発掘部分を含めた斜面全体に広く散布している。いずれも小破片であるが、椀、擂鉢等の中世の土器片、古伊万里等の近世の土器片が主であり、その他、奈良時代の須恵器片等が認められる。尾根部分では発掘区に接して、南側に円墳―毎戸塚―が存在する。内部主体等内容ははっきりしていない。付近には埴輪片が認められる。

調査は集落等の存在が予想されたので、当初は全面発掘を予定し、４×４ｍのグリッドを設定した。平坦部分では耕土下に花崗岩バイラン土のしっかりした面が認められたので、この面を地山と考え調査を進めた。しかし、緩斜面との境付近を一部掘り下げたところ、地山と考えた面の下に黒色砂層が堆積しており、この下部に花崗岩バイラン土の面を認めた。この部分の検討により、斜面堆積の様相を呈しており、小支谷が埋没していると考えられたので、発掘はトレンチにより斜面の状況を確認することとした。この結果、東に口が開く小支谷であり、発掘部分が小支谷の南半分にほぼあたることが確認された。つまり、蔦山より南に伸びる尾根はこの発掘部分付近では狭いやせた尾根となり、南側で再び若干広くなる。この広くなった部分に毎戸塚が築造されている。

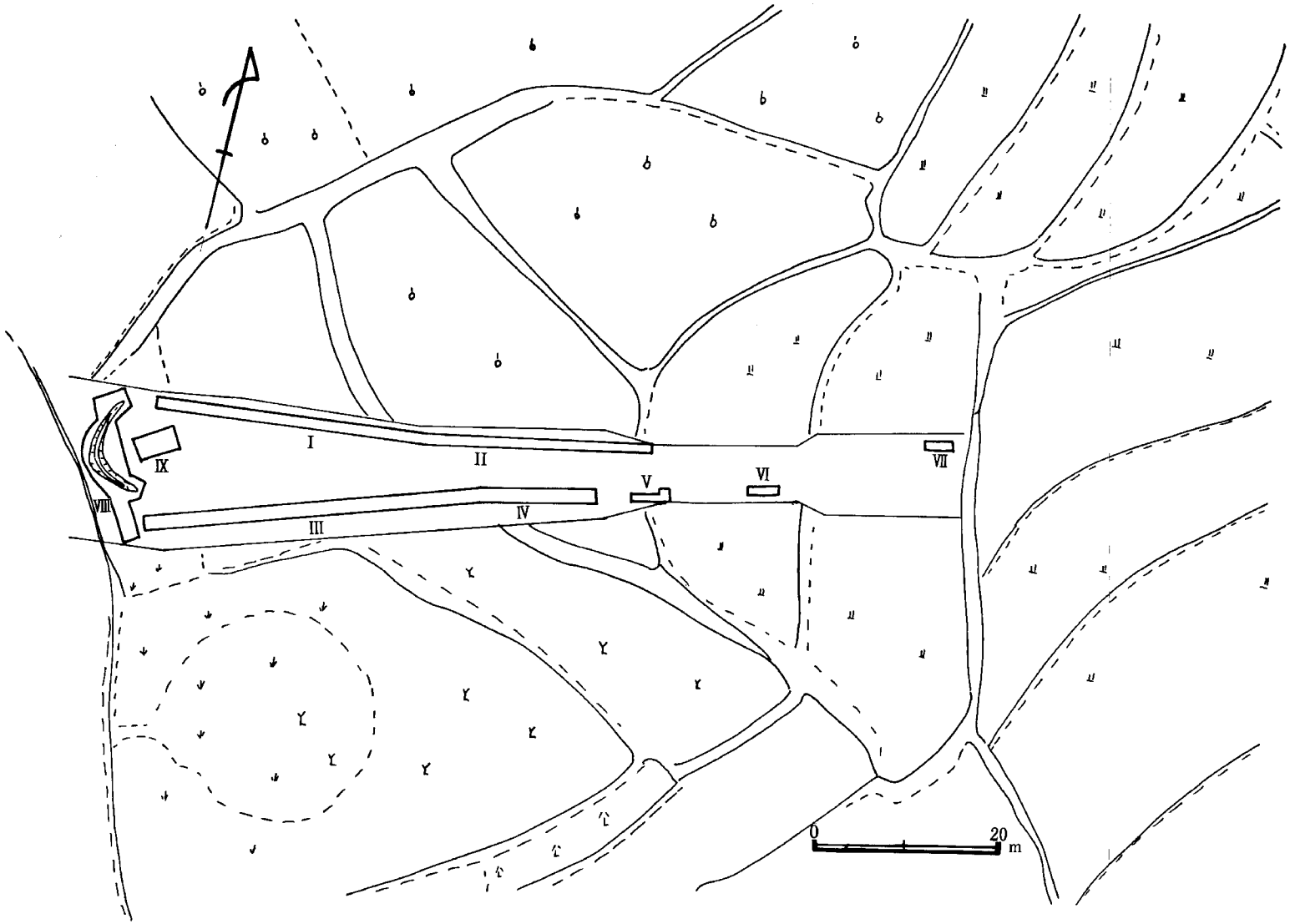
遺物は表面採集された遺物と同じく、擂鉢片、土鍋片、坏片、古伊万里片が主であり、他に須恵器片、瓦片等が匂配の変化する部分に特に出土しており、斜面上部の毎戸塚側からは円筒埴輪片が出土する。いずれもその量は多くない。又、銅銭も一個出土している。

尾根頂部では孤状を呈する溝が検出され、溝内の北側からは須恵器の蓋杯が出土する。この溝はこの調査での唯一の遺構である。

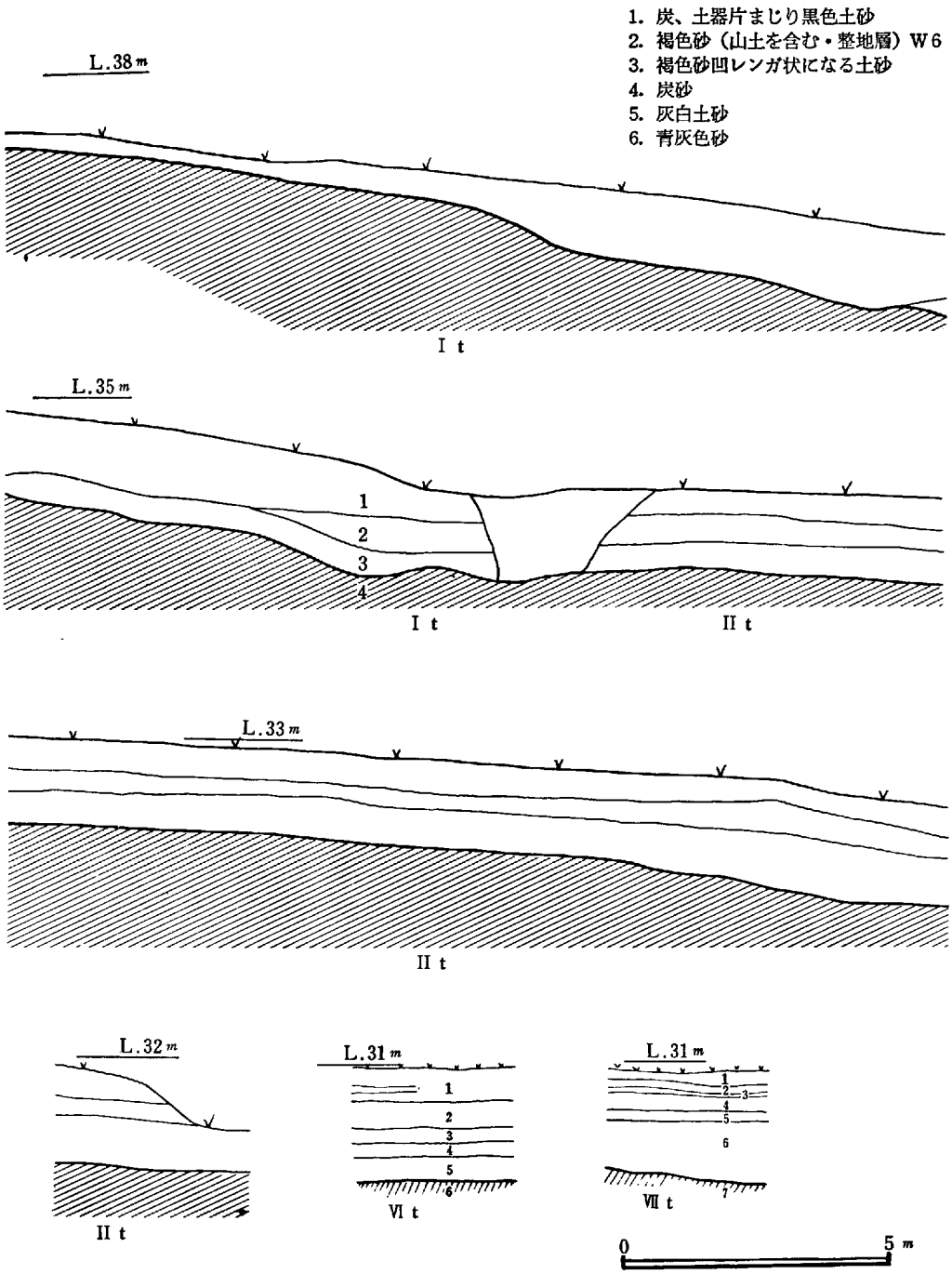
第２節　遺　　構

１．孤状溝　（第32図）

発掘区西側、尾根頂部に検出される。半径約６ｍの弧状の溝であり、幅は約１ｍ、深さは約20～30㎝である。溝の両端は底がしだいに高くなり、周囲との境が明確でなくなる。この溝が東側に伸び、円等になるとは考えにくい。溝の北端より須恵器、蓋杯が当初より置かれていたと思われる状態で出土する。南側に存する毎戸塚と何等かの関係をもつ遺構であると思われる。



第30図　毎戸西方遺跡平面図

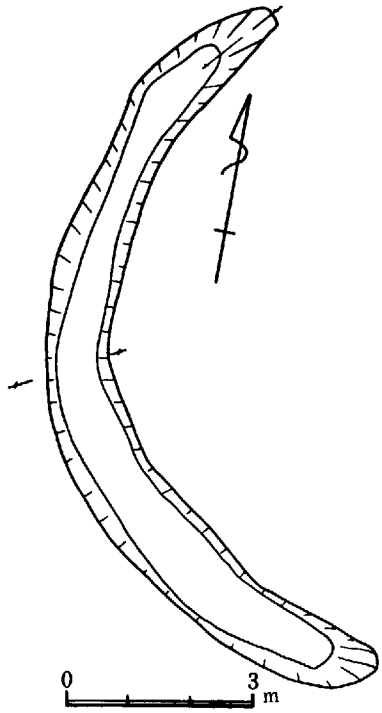


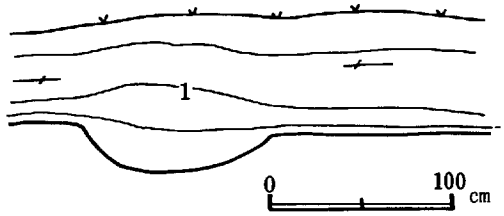
I t　1.耕土　2.褐色土　3.黒褐色土　4.地山（花崗岩バイラン土）

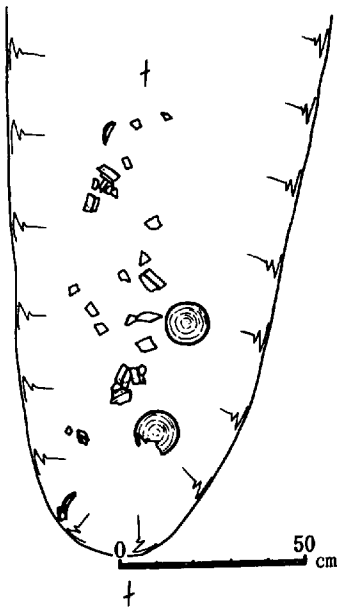
VIt　1.褐色土（整地層）　2.灰色土まじり細砂　3.淡黒褐色土　4.灰色土　5.黒褐色粗砂　6.地山

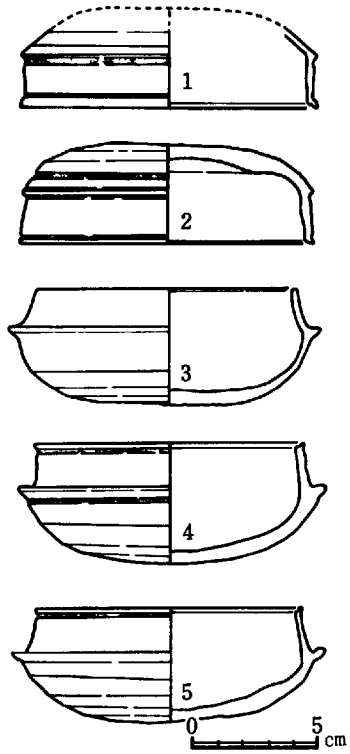
VIIt　1.耕土　2.褐灰色土　3.暗褐灰色粗砂　4.淡灰白色粗砂　5.灰色粗砂　6.黒褐色粗砂　7.地山

第31図　トレンチ断面図

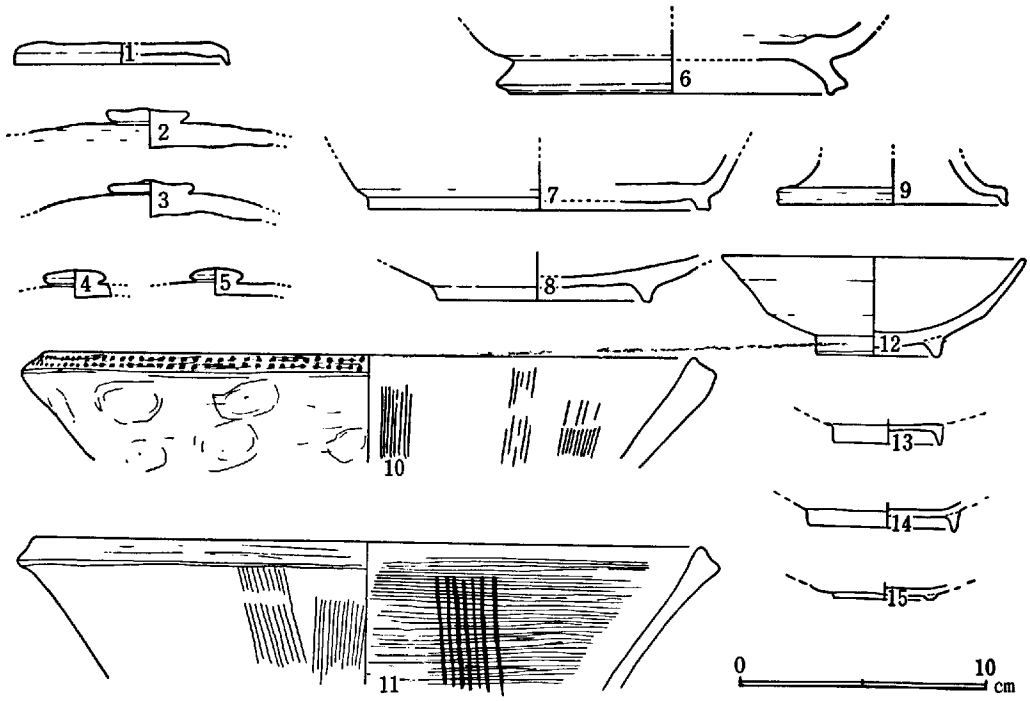








第32図　弧状溝実測図、土器実測図



第33図　出土土器実測図

第3節　遺　　物

1.　弧状溝出土遺物　（第32図1～5）

須恵器の蓋が2個体、杯が3個体出土している。杯はたちあがりがやや内傾し、3を除き端面は内側へ傾斜し、浅く凹む。受部はやや上方または水平に伸び、端部は丸味をもつ。底部はやや扁平な感じであり、ヘラ削りが行なわれている。蓋は天井部は余りふくらみがなく、口縁端面は杯4、5と同じく内側へ傾斜し、端面と内外面とをわける稜線は明瞭である。いずれも青灰色又は灰色を呈し、微細な砂粒を含む土を用いた堅緻な焼成である。

2.　トレンチ出土遺物　（第33図）

土　器

蓋は宝珠の退化した偏平のつまみがつく。いずれも灰色を呈し、堅緻な焼成の須恵器である。播鉢10は口縁端部に叩き目が残る。灰色を呈するやや軟質に焼成された須恵器である。良く使用されており、内面は磨滅がいちぢるしい。椀は底部に簡単な高台を張り付けたものであり、福山市草戸千軒遺跡で出土しているものと同様のものである。ほとんどが二次的な焼成を受けている。

瓦、　いずれも平瓦片であり、須恵質の堅緻に焼成されたものである。表面には布目痕、裏面には縄目痕が残る。

埴輪、いずれも円筒埴輪の小片である。刷毛目の方向は縦方向のものと横方向のものとの二

通りが認められる。赤褐色を呈し、砂粒を含むやや軟質に焼成されたものである。

第4節　まとめ

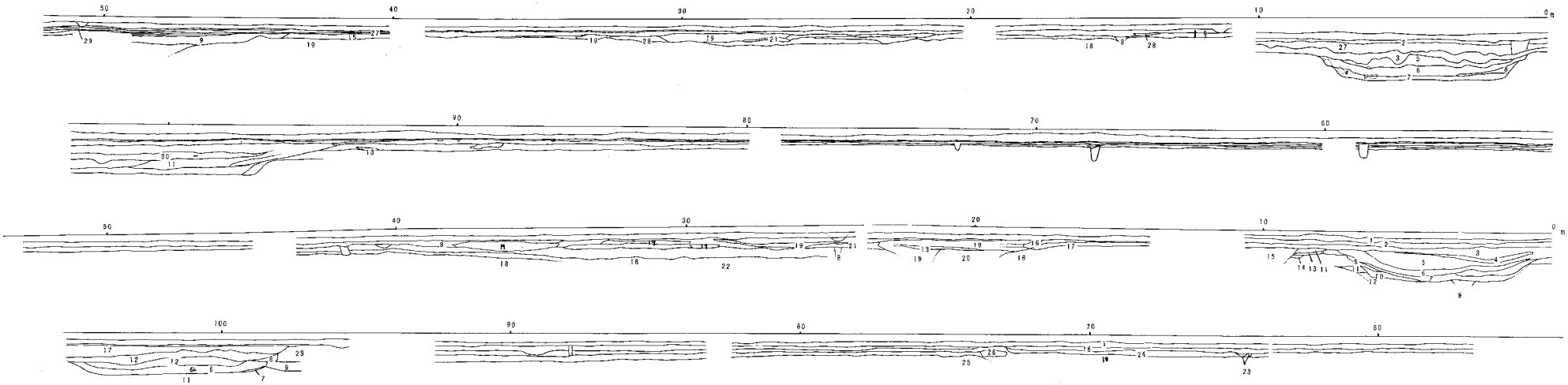
今回の調査で検出された遺構は尾根頂部付近の弧状溝のみであり、他の部分は谷部分となっており、遺物も斜面堆積の土層中より混在して出土したにすぎないが次のことを指摘できるのではないだろうか。

弧状溝は隣接して存在する毎戸塚との関係で祭祀、その他の性格が考えられる。

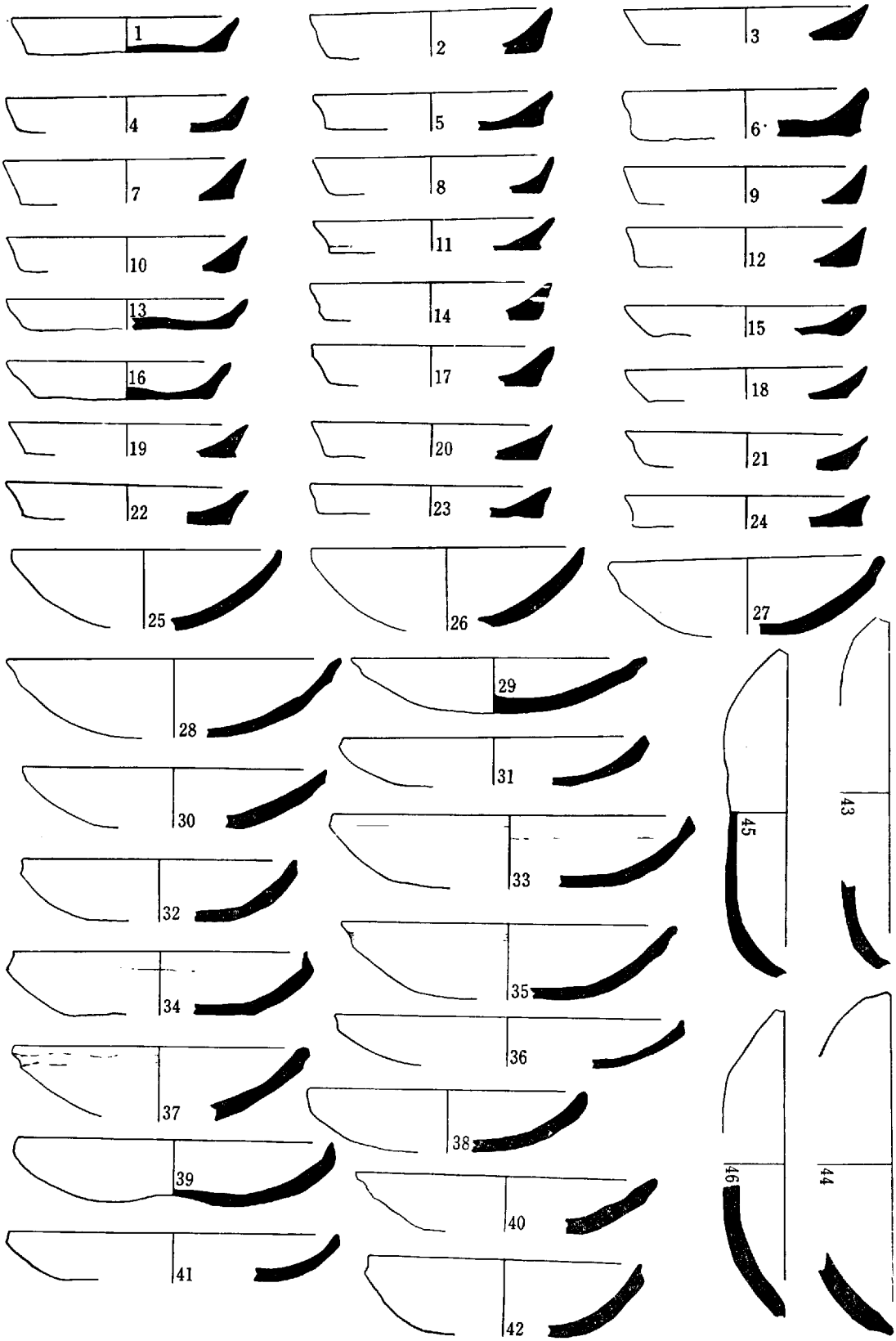
奈良時代の土器片、瓦片が出土しているが、毎戸遺跡との関係がどうであったか、又、この点で毎戸遺跡の出土土器の大半を占める平安時代の土師器、坏・有脚小坏が本遺跡で出土していないことも注目されるのではないだろうか。

毎戸遺跡では中世の土器片はほとんど認められないが、本遺跡では比較的多く出土している。これは中世の集落が本遺跡の存する谷の西側に存在する可能性を示しているのではないだろうか。

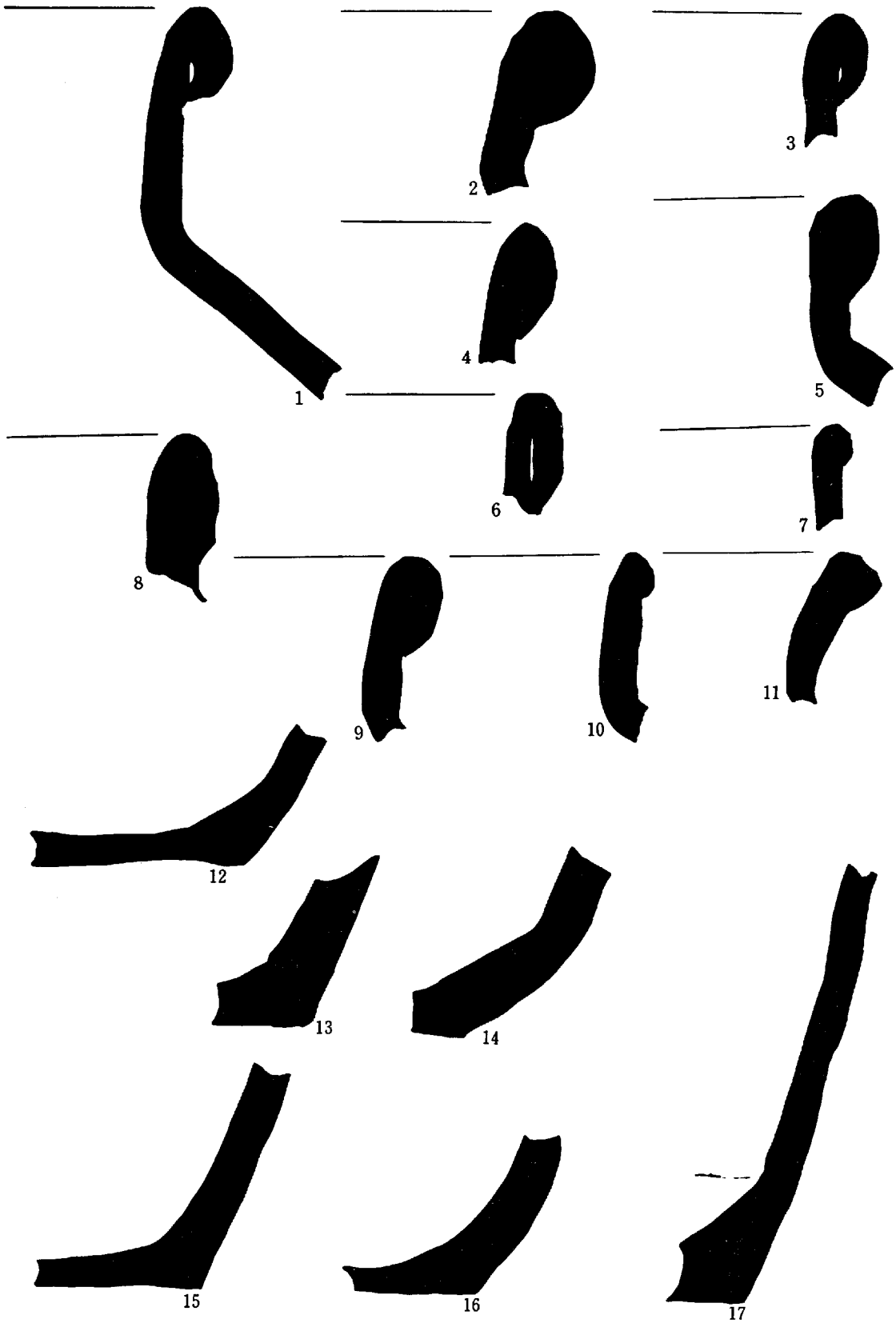
図　　版



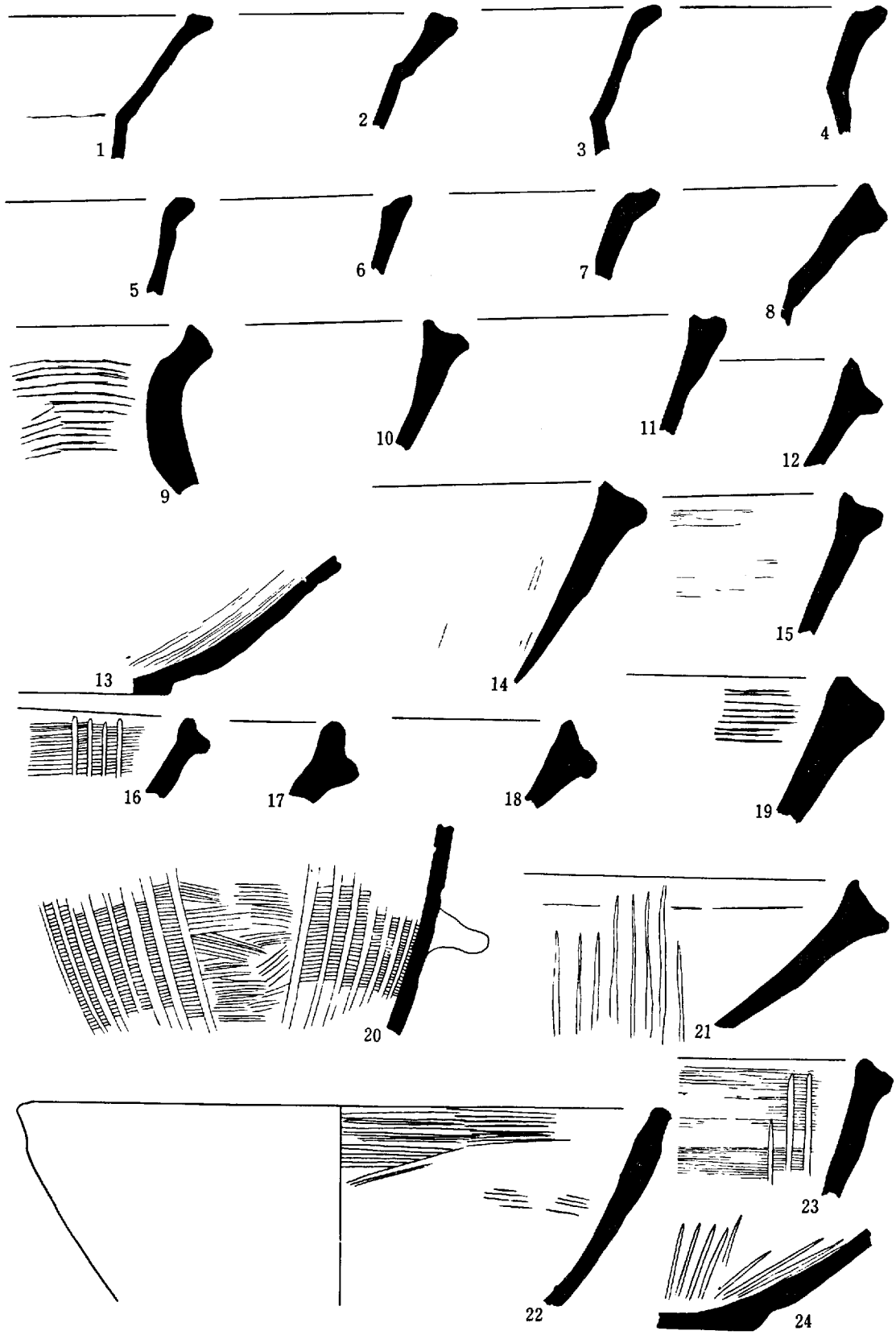
図版 1. 南一北土層断面図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

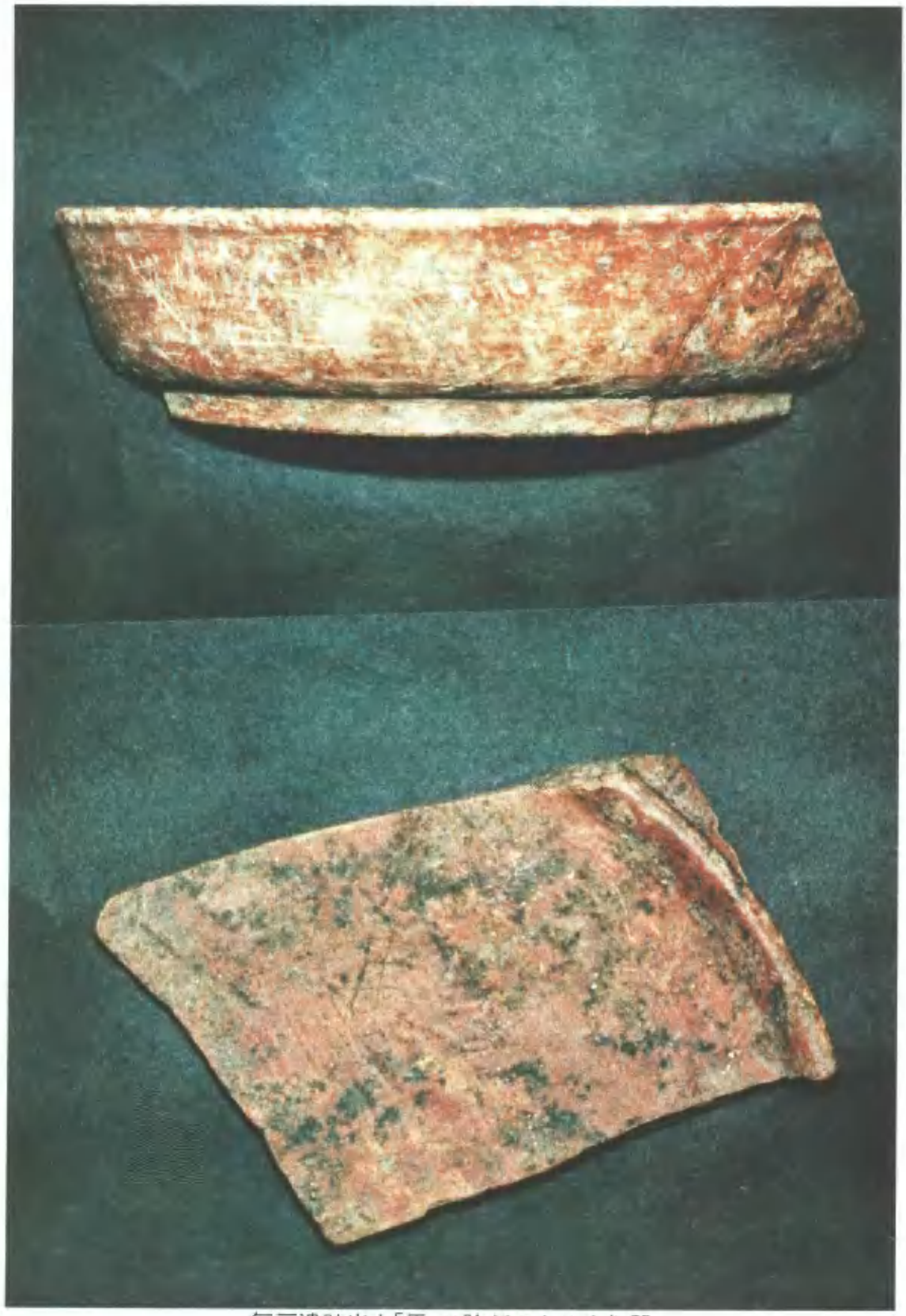
川面館出土遺物



川面館出土遺物



川面館出土遺物



毎戸遺跡出土「馬」の陰刻のある土師器

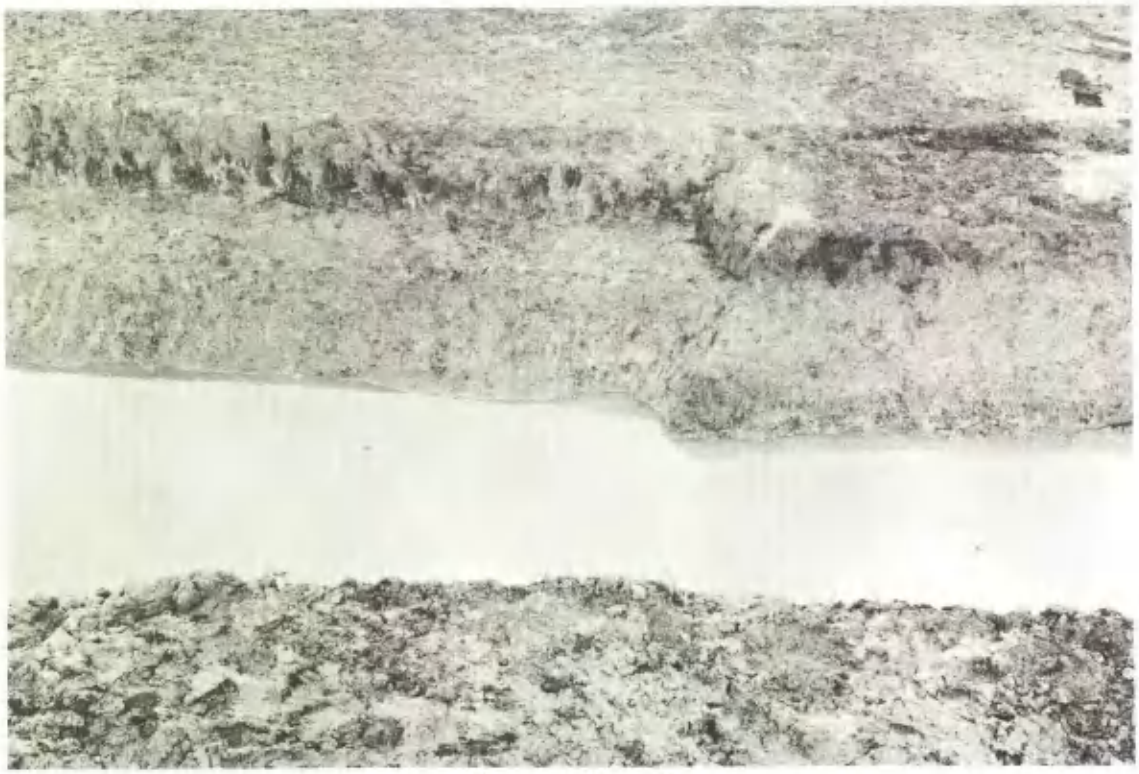
図版 5 － 1

西より東を望む

図版 5 － 2

東より西を望む

図版 6 － 1



第 1 橋 脚

図版 6 － 2

第 2 橋 脚

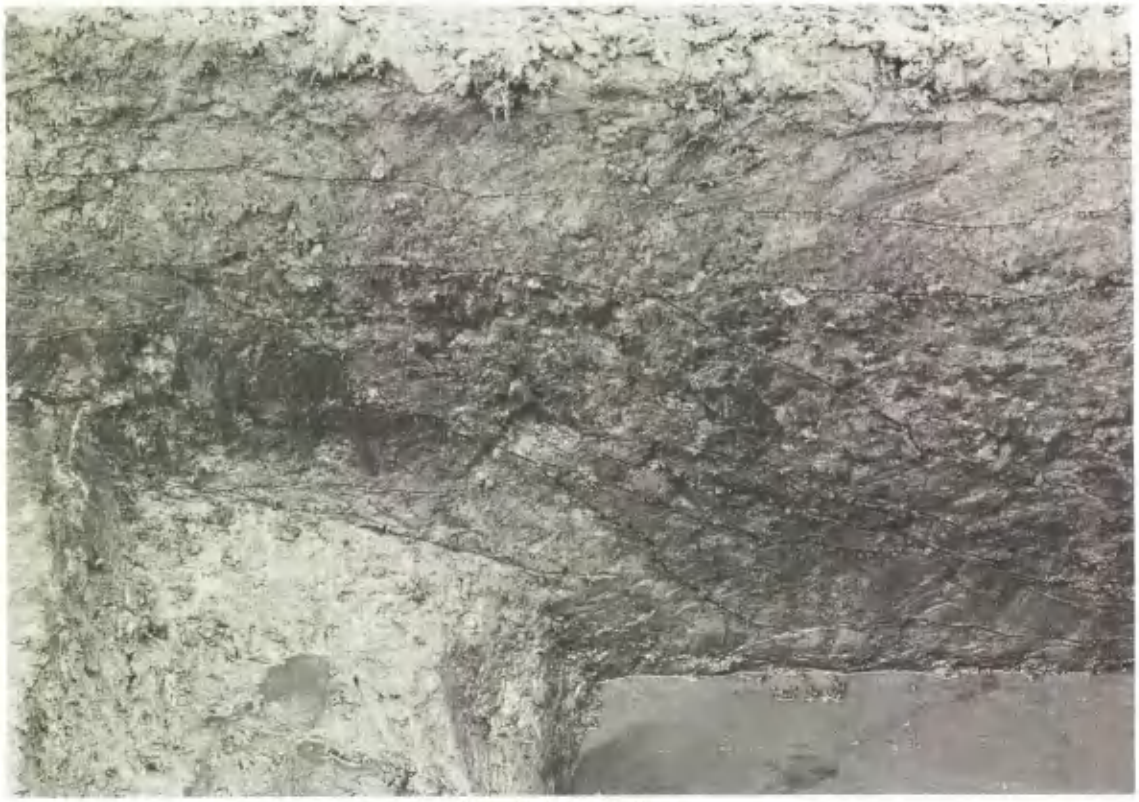
図版７－１

北側道Ｐｉｔ

図版７－２

第２橋脚Ｐｉｔ

図版 8 － 1



北側道濠土層断面

図版 8 － 2

第 1 橋脚亀山焼出土状態

図版 9 － 1

建物Ⅰ　西部（南より）

図版 9 － 2

建物Ⅰ　西部　溝ⅢⅣ（北より）

図版10－1

礎石Ⅰ　南より

図版10－2

建物Ⅰ　雨落ち溝断面

図版11－1

建物II（東より）

図版11－2

建物II　溝III（西より）

図版12－1

建物II　柱穴B－2（南より）軒平瓦出土状態

図版12－2

建物II　柱穴A－4柱根（南より）

図版13－1

建物Ⅰ　東部及び柱穴A列（西より）

図版13－2

建物Ⅰ　東部（北より）

図版14－1

建物Ⅲ（北より）

図版14－2

柱穴列（北より）（第２橋脚）

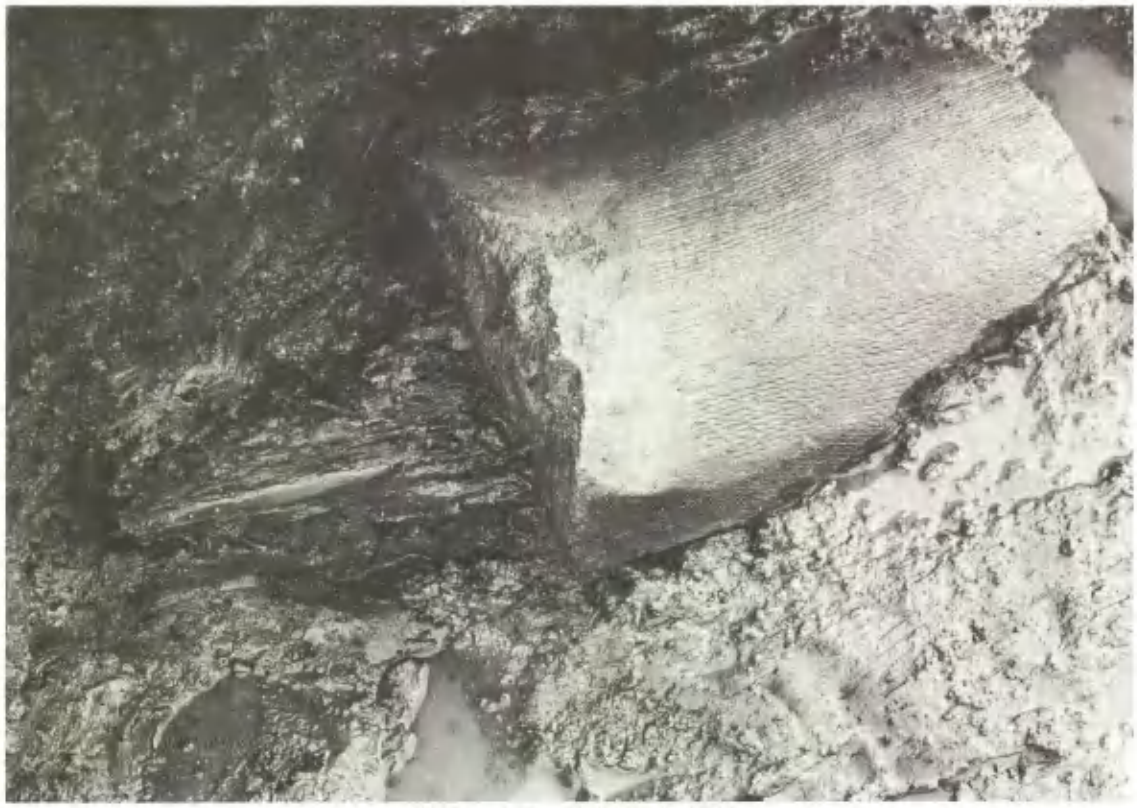
図版15－1

溝Ⅰ、瓦、柱根出土状態（北より）

図版15－2

溝Ⅰ（東より）

図版16－1



溝Ⅰ　瓦、柱根出土状態

図版16－2

第六橋脚全景（東より）

図版17－1

溝 VI （西より）

図版17－2

第II トレンチ全景（東より）

図版18－1

土坑Ⅰ断面（北より）

図版18－2

土　坑　Ⅱ

図版19－1

土坑・瓦出土状態

図版19－2

土坑　III　出土軒平瓦

図版20－1

軒　丸　瓦

図版20－2

軒　丸　瓦

図版20－3

軒平瓦部分

図版20－1

軒　丸　瓦

図版20－2

軒　平　瓦

図版22－1

毎戸西方遺跡全景

図版22－2

孤状溝内遺物出土状態